
Liarsoftの嘘つきエンターテイメントマガジン
USO
月刊うそ。
TOPIX
● 鈴鹿の美貌の秘密（袋とじ）
● ネコアルクまっぷたつ!?そ～じ聖杯戦争に参戦!!
● のぶりん、ドリフターズ結成。妥当ひょうきん族
● 東京オリンピックに探検競技が追加。川野口ノブ隊が代表選出か？
● 女子による女子へのホワイトデー講座＠九星女子
● 社内ではやはり桐田賀が人気です
● キトラ、日本初の猫カフェ経営開始？
ライアーソフト新作予告
「フェアリーテイル・レクイエム」
特集「歴史」歴史を扱ったタイトル大集合！
……なお、多すぎて全部扱えなかった模様
Volume 48
400ニコル（税込）

INDEX

SEASONLY LIARMARU

COVERGIRL



「人に歴史あり！」「ウサギにも歴史あり！」
「初代から前代までは一人ウサギ」「今は２人」
「ウサギなので２羽ウサギ」「すなわち！」
「力の１号！」「愛人は２号！」「え？」「え？」



フェアリーテイル・レクイエム

Fairytale Requiem

さく・ライアーソフト
え・大石竜子

スケッチブックに書き残された意味深な文章
かまどから現れた黒焦げ死体
少女たちが時折見せる淫靡な姿
不意に蘇る忌まわしい記憶のかけら

あなたは答えられるだろうか。

「――つみびとは、だあれ?」



メルヘン・ミステリアスホラーADV/2015年7月発売予定

特集 歴史



はーい、もっともエロい新選組（某漫画家さん認定）のカモちゃんこと、新選組局長、カモミール芹沢よん。

今回、栄えある歴史特集の巻頭を飾るということで局長の私が御案内～！　え？もう一人の局長のゆーこちゃんはどうしたかって？　口うるさーい、トシちゃんのお守をお願いしちゃいました～。

トシちゃん、私に司会は無理だとか、新選組の恥を晒すなとか色々うるさいのよね～。

さて、紹介紹介！　ライアーソフトには歴史を取り扱った作品が沢山あってね。私たちの出る「行殺・新選組」はなんとライアーソフト第2弾の作品！昔から歴史モノばかりだったのね。

史実にのっとりながら、不条理を交えつつ幕末を駆け抜けていく私たち新選組の顛末を描くこの作品は、後にキャラクター追加などもされた「行殺・新選組ふれっしゅ」になって現在も好評発売中！　買ってね！！

……え？　なに、もっと商売っ気を隠せって？

ステマ・即・斬が幕末志士のモットー！

なんと、歴史モノ特集ということで新選組コーナー宛のお便りも来ているのね。

近ごろ水戸天狗党とやらが世間を騒がせているのも天狗の仕業ですか？（もりぎ呉服店さん）

あー、ゆーこちゃんと組む前のアレかー。うーんなんか偉そうな羽黒の天狗と色々あったかもね～。

ちょっと黒歴史開幕になりそうなので、このお便りは蝦夷地の方へ向かってポイしちゃお！（姫巫女銀河コーナへ飛んでいくお便り）

さて新選組に関する話題の続き。なんと私たちの事が新選組の発祥の地、日野市の市立新選組のふるさと歴史館で取り上げられちゃいました！　企画展「描かれた新選組」展でパッケージ展示されたほか、副読本での研究文中でも紹介されています。

日野市へお立ち寄りの際は是非寄っていってね～。



こちらが紹介された
博物館発行の副読本です

ANGEL BULLET



クラウス「セーラ、私たちの紹介ページですよ！　鳥さんに紹介していただいたウソ族の変酋長に土下座した甲斐がありました！」
セーラ「ページってそれで取れちゃうんだ…」

「ANGEL BULLET」は西部開拓時代を舞台とした作品です。ダイムノベルのガンマンにあこがれ、父親を探すために西部へと一人やってきたセーラを待っていたのは、ファンタジーさながらのモンスターと、ビリー・ザ・キッドをはじめとする死の淵より蘇ったガンマン達だった！　異端の神父であるクラウスと共に駆け抜けたセーラがその果てに見たものは？

セーラ「この紹介って、嘘はついていない分ヒドイ気がする」
クラウス「何を言ってるのですかセーラ！　あなたの素晴らしい"責め"を見ていただくの為にも…。こう赤の他人にプレイを見られるのって凄く興奮しませんか？」
セーラ「こっ…このヘンタイっ！」

「ANGEL BULLET」は西部開拓時代を舞台とした作品です。ジャンルは、

土下座調教西部劇

です。





発売当時店舗特典だった
テレカ画像をノートリミング
で公開！



信貴山城——
　平グモちゃんは突如として狂を発し散々表面をなぞっていた黒い板を欄干の向こうへとブン投げた。
「っきーー！！　五十回やってもボス行かないじゃーーん！」
　またか、と呆れる松永久秀。平グモちゃんはつい先日も「全然ボス出ねーーっ！」と意味不明なことを叫んで黒い板を投げ、ふて腐れていたのだ。前回は金平糖をあげて機嫌を取ったが今回は虎の子の南蛮菓子も効き目がない。
「こんなお菓子食べてる場合じゃないって！　安土行こう！」
「安土って近江の安土山？　んー、不用意に六角殿の領地へ踏み入りたくはないんだけど」
「あ、そか、まだ六角か。……六角になんか用はない！！　くそー！
　この怒りをどこへぶつけたものか！」
　さっき黒い板にぶつけたばかりではないかと思う久秀であるが、平グモちゃんの怒りに火を注ぐのは目に見えているので黙っている他はない。
「そうだ久ちゃん！　ボクちゃん将軍のトコ行こ！　あそこならリアル刀剣男士が山ほどいるはず！」
「なに！？　いまなんて！？」
「ちゃんと聞いてなきゃダメだって！　そんなんだから御城プロジェクトで信貴山城が実装されないんだよ！！」
「なにそれ！？　なにで信貴山城がどうだって！？」
「あーもー！　とにかく二条城行くの！　んで、ホロレアの三日月宗近ゲットすんの！　行くよ！！」
「ちょっと待っ！！」
　久秀は相変わらず平グモちゃんのいっていることが分からないものの、一騒動起きることだけは確信できた。

二条御所——
「ババアも一緒に出仕とは珍しいな」
　二人を迎えた将軍足利義輝は嬉しさを噛み殺した顔をこわばらせながら、
「……菓子か？　菓子を所望か？　落雁であればいくらでも食わせてやるぞ？」
　先手を打った。ところが平グモちゃんは鼻で笑い飛ばす。
「ふっ、あたしがいつまでもお菓子を貪る浅ましい女だと思ってたら大間違い。いまは刀剣！　刀剣男士っ！」
「ん？　刀は食えぬぞ？」
「だれが食べるっていったのよ！　三日月宗近って、将軍家秘蔵の刀剣男士なんでしょ！　いいから黙って連れてきて！」
「おお！？　宗近が見たいと申すか！？」
　二つ目の喜びに義輝は我慢しきれず破顔した。
　当代きっての剣豪二人から指南を受けた義輝だけに刀剣への愛情も並々ならぬものがあり、足利将軍家秘蔵の刀にとどまらず古今の名刀を収蔵している。しかしせっかくの名刀も見せる相手がいない。無闇に自慢すれば将軍の沽券に関わるし、周囲の者は憚って刀剣の話を持ち出さない。
「うん！　見たい！　見たいというかちょうだい！！」
　平グモちゃんのように正面からねだられるのは初めてである。
「誰がくれてやるか！ されど見たいと申すのなら、見せてやらぬこともないぞ？」
「ホント！？　じゃあとりあえず連れてきて！　どうするかはそのあと考えるから！」
「んー、どうしたものか。……よし！今後、予を『小僧』やら『ガキ』やら子供扱いせぬこと。この約ができるなら見せてやってもよい」
「するする！　約束する！　早く！」
「では、しかたないな！」
　義輝は満面の笑みで侍女を呼び、山ほどの刀箱を持って来させた。刀箱を前にした侍女が部屋の両脇を埋める中、ひときわ大きな刀箱を持った侍女は義輝の脇へ行く。刀箱から一振りの刀を取り出した義輝は鼻高々に鞘を払う。
「見よ！　これが三日月宗近である！」
　三尺を越える刀身が煌めく。
　対して平グモちゃんは頬を膨らませて不満顔。
「なにそれ？　鉄板じゃん」
「み、三日月宗近を鉄板と申すかっ！？　足利将軍家秘蔵の逸品ぞ！
　それをよくも……！」
「はいはい、じゃあ鉄棒鉄棒。平たい鉄棒ねー」
「おっおっおのれーーっ！！」
　思わず太刀を振り上げる義輝の前に、久秀が慌てて飛び出す。
「ご無礼っ！　まことにご無礼つかまつりました！　妻は刀剣の目利きができないゆえ！」
「どけぇい松永っ！　どかねばババア諸共斬り捨てるぞっ！」
「私は斬られても構いません！しかし平グモちゃんだけはお許しを！」
「バイバイ久ちゃん。あたしが必ず仇討ちしてあげるから成仏してね」
「「え！？」」
　と驚く久秀と義輝。
「あの……平グモちゃん？」
「ちゃんと花と落雁供えてあげるよ？　あ、羊羹のほうがいい？」
「う……うん……」
「じゃあ羊羹ね♪」
　義輝は久秀の惨状を目の当たりにして冷静さを取り戻し、三日月宗近を鞘へ収めた。
「あれ？　斬らないの？」
「……うむ。あまりにも松永が憐れでな」
「だよねー。理不尽なガキの我がままで斬り捨てられるんじゃーねー」
　苛立ちを抑え話題を戻す義輝。
「これ以外に三日月宗近があると申すか」
「これ以外もなにも、あたしがいってるのは刀剣男士」
「なんだそれは？」
「あーもー！　ちょっと待ってて！」
　平グモちゃんは懐から紙を矢立を取り出し、さらさらと絵を描き始める。
「どれどれ」と平グモちゃんの肩越しに覗き込んだ久秀は途端に顔から精気が抜けていった。
（これが平グモちゃんの求めてやまない……奴なのか？）
　紙に描かれていくのは線の細い美男子である。
（平グモちゃんってこういうのが好みなのか……いや、でもそれならなんで妻になってくれたんだ？　いやいや、ひとまず紹鴎さんの目を離れてから選び直すつもりだったとか？　いやいやいや、平グモちゃんはそんな人じゃないはず）
　久秀が逡巡しながら嫉妬心を募らせていると、そうは知らない平グモちゃんが完成した絵を義輝に見せつける。
「これが三日月宗近か？」
「そう！　三日月宗近じーちゃん！」
「こんな弱そうな男なぞ知らん」
「知ってなよ！」
「ふん。仮に知っていたとすればどうするつもりだ。まさか松永と別れてそやつとくっつくのか？」
　久秀の耳がぴくりと動き平グモちゃんの答えを待つ。
「ちょくちょく出てくる銀背景の多聞山城を作った久ちゃんと、存在その物がホロレアな三日月宗近を比べること自体がおこがましいって！それに二次元と三次元を一緒にすんなー！」
「虹！？　惨事！？」
「久ちゃんはリアル！　じーちゃんはゲーム！　いる人といない人、比べてどーすんの！　ゲーム脳！？」
「ではその絵の男がいないとわかっていながら、そいつを出せと申しておるのだな？」
「だって、もしかしかたらいるかもしんないじゃん！コラボとかー！」
「んーむ、よく分からぬが……この三日月宗近を名乗る男がいたら松永と別れてその絵の男を取るのだな？」
「う、うーん。それは悩むなぁ」
（悩むんだ……平グモちゃん、悩んじゃうんだ……）
　久秀もついに自我が揺らぎ始め、
（ああ……なんかもう、どうでもよくなってきた……）
　長屋でくすぶっていた時に近づいていく。
　事情は分からないまでも久秀の変化に気づいた義輝が声を掛ける。
「安心しろ松永。もしもの時は予が松永に相応しい者を紹介してやる」
　答える平グモちゃんは、
「はあっ？　正気ぃ？」
　頬を膨らませ口をとがらせる。
「一人になった松永に新しい妻を娶らせても構わぬはずだ」



「ぐ、ぐぅ……」
平グモちゃんは返す言葉を失い、頬を萎ませた。
「松永に不満があると申すなら、そっちにも紹介するぞ？　その絵の男とはいかんがな」
「久ちゃんに不満ねぇ。不満はなー……特にはないかな」
「ではなぜその絵の男を求めて二条御所まで参った。本当は思うところがあるのであろう」
「あるのかな？　久ちゃんはどう思う？」
核心的な問いも自我が崩壊寸前の久秀には届かない。
答えが見つからず傾げる平グモちゃんを見て、義輝はさらに夫婦関係に踏み込んだ。
「試しに一度、別れてみてはどうだ？」
途端、平グモちゃんは激昂し、
「なに勝手なこといってんのよ！　久ちゃんが独り立ちする目処が立ったり、別れたいっていうんならともかく！　よその奴からいわれる筋合いじゃねーっ！！」
畳を踏みならして義輝へ殴りかかるが、普段とは異なる本気かつ渾身の拳も義輝へは届かず、次の瞬間には平グモちゃんが畳へ押さえつけられていた。
「があああ。痛っイイ」
平グモちゃんを後ろ手に取り押さえたのは三日月宗近を運んで来た侍女。優しい微笑みで「上様にお手を上げるのはおやめください」と穏やかに諭すが、平グモちゃんは「お……折れるう～～」と涙声を漏らしながら必死に残りの手で畳を叩く。
「あ……やめて！　それ以上、いけない」
止めに入ったのは久秀である。平グモちゃんの危機に際し、我を取り戻したのであった。
侍女が目で義輝に尋ねると、義輝は無言で頷いた。すると侍女は「もうおやめくださいね」と手を緩め、立とうとする平グモちゃんに手を差しのべる。
「ホロレア二条城に住んでるからっていい気になんなー！」
平グモちゃんは侍女の手を払うと辺りかまわずペッペとツバを吐き散らかし、
「久ちゃん！　早く帰って信貴山城実装に備えて資材貯めよ！」
困惑する久秀の手を引っ張る。さらに義輝へ向かい、
「あとそこのガキ、覚えけ！　この怨みはしんけんが本スタートしたら晴らしてやるからなー！　そのクビ洗って待ってろよー！　あたしのアツい下克上活動、ゲコカツ、始まります！　ウフヒッ♪」
吐き捨てて出て行くのであった。

嵐が去り静謐を取り戻した部屋。義輝のにやけ顔をいぶかしんだ侍女が訊ねる。
「下克上と申しておりましたが罰せずに済ませてよろしいのですか？」
義輝は普段見せない朗らかな笑顔で
「気にするな。あれでこそ平グモ。いつもあの調子よ」
と答えた。さらに一拍おいて顔をうつむけ、
「そう……いつも、な」
小さくつぶやいたのを侍女は見逃さなかった。しかし侍女は寂しげな義輝を見ているしかできない。見守ることだけが侍女という立場に許された唯一の行為なのだ。

数年後、久秀は三好三人衆と共に二条御所の義輝を襲撃。
侍女たちは義輝を守らんと奮戦し次から次へと敵兵をなぎ倒したが多勢に無勢、一人また一人と斃れ、義輝の討ち死にに先立ち全滅したという。
ただし全滅ではなく、助け出された者もいるという噂もある。

ー了ー

オイランルージュ

oui-lin rouge

Liar-soft 20th

江戸は吉原、色町を舞台としたこの作品。本編ではメインの花魁３人以外にも、サブキャラクターの女性が登場し、彩を添えていました。ここではその時の案を大公開。手堅いものから、奇抜なものまで色々有りました。

遣り手

遊女の監視監督係にして現場主任、クレーム対処係。年増のワケアリキャラであることを想定していました。

（その昔は新町か島原の花魁。想いを交わした男と心中するもひとり生き残り、抜け殻のようになったこともあったが、つてを辿って吉原にて再出発。指切りしたため小指の第一関節から先がない。…などのキャラが考えられていました）

商人

簪、長柄傘、駄菓子などを届けにくる出入り商人。

「女性」で「出入り」というのが当時の風俗にはあわないのでは？　と懸念されました。

絵師

浮世絵師。ジャンルは美人画、春画、遊郭画。職業的興味から出入りしているものと思われる。

客と遊女の戯れを、眉ひとすじ動かさずに描きとめている職人肌。

付け馬屋

見世の金を踏み倒す者を捕まえて取り立てる人。

血気盛んな姉御肌っぽいイメージ。

吉原芸者

ゲーム内の進行によって変化するキャラクターとして考えられました。

初期……芸事に目の肥えた客を喜ばせるための助っ人。体は売らない。

中期……湯女の吸収合併により、芸者と遊女の境界が曖昧に。「芸事で食っていきたいのに食われる側とは」そんな葛藤が…。

後期……見番所属の芸者、二人一組で座敷に入るようになる。

女衒

性格として異なるタイプが考えられていました。

貧しさから身売りした子を江戸風に育て上げ、信頼のおける遊郭に引き渡す「根っこは優しい姉御」タイプ。

麗しい幼女を掻っ攫っては売り飛ばす、「腹ん中真っ黒、芯から悪女」タイプ。

その他にも

夜鷹（退廃気味）

色比丘尼（白拍子の格好）

傀儡女（箱から人形を出して劇を演じてくれる。呪術も使える）

などが、案としてありました。

本編では、「彫り物師」や「医師」等の職のキャラクターが採用され、それぞれの職にあったイベントが展開されています。



SEVEN-BRIDGE ネクタイ話

SEVEN-BRIDGEはif歴史物でしたが、衣装はかなり大胆に！　てきとうに!!デザインさせて頂きました。それでも当時の階級意識や身分制を考えない訳にはいかず、色々考えたものです…。

というわけで、そうした所が明確になりやすい顔周辺――ネクタイの話です。

ジェーンはやっつけ感を出そうと、こんな衣装になりました。

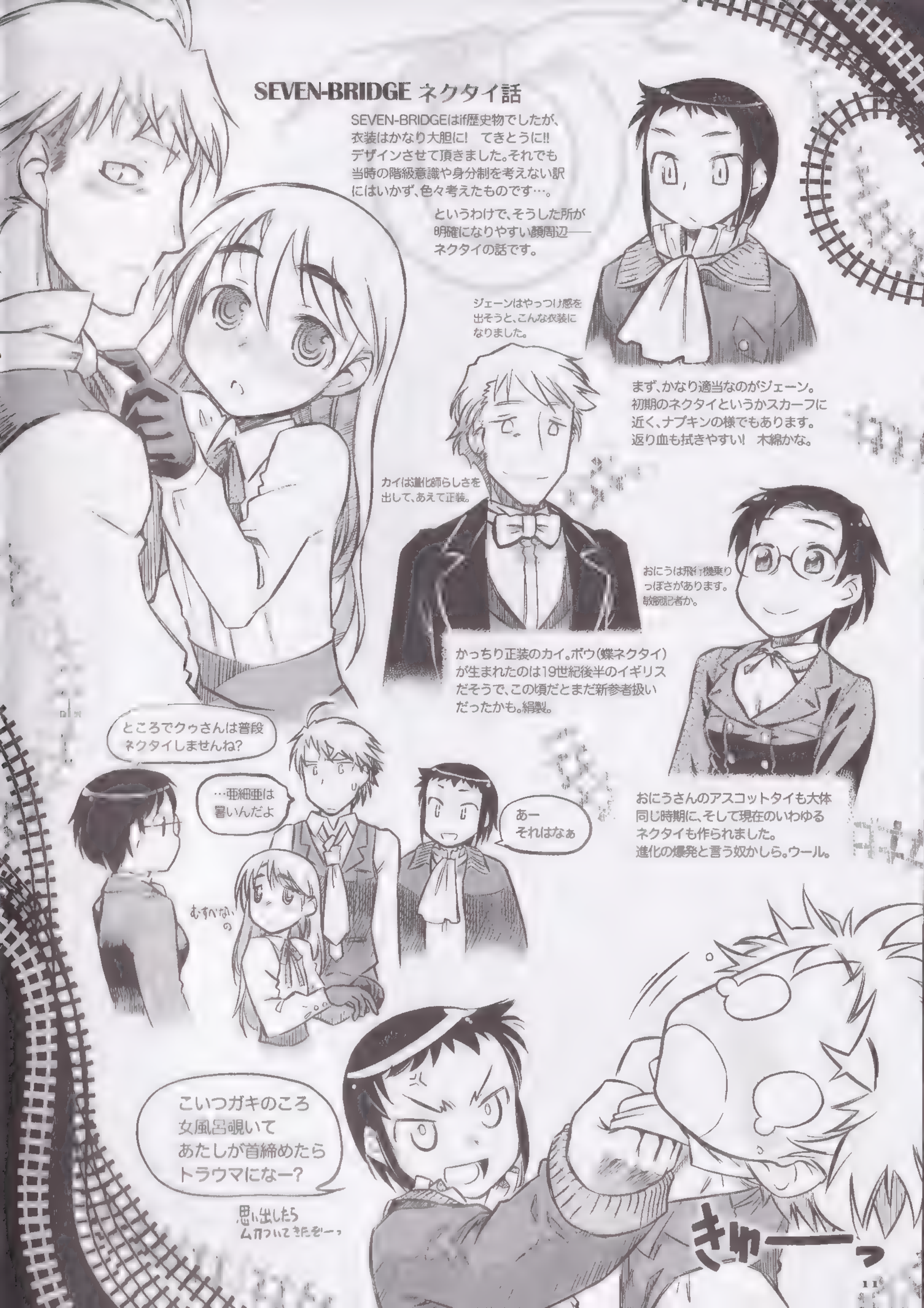
まず、かなり適当なのがジェーン。初期のネクタイというかスカーフに近く、ナプキンの様でもあります。返り血も拭きやすい！　木綿かな。

カイは道化師らしさを出して、あえて正装。

かっちり正装のカイ。ボウ（蝶ネクタイ）が生まれたのは19世紀後半のイギリスだそうで、この頃だとまだ新参者扱いだったかも。絹製。

おにうは飛行機乗りっぽさがあります。敏腕記者か。

おにうさんのアスコットタイも大体同じ時期に、そして現在のいわゆるネクタイも作られました。進化の爆発と言う奴かしら。ウール。



漆黒のシャルノス

~What a beautiful tomorrow~

『読み合わせ』

「脚本、もう刷り上がっているんだろう？」

[illegible]

ロンドン、ホーボーン・エリアの一角にひっそりと佇むパブの[illegible]

[illegible]

ブラム・ストーカー。

我が親友にして、我が最愛。

[illegible]みは同じことを言うじゃないか」

「そうだろうか」

「そうだよ。エイブラム」

私は微笑む。

[illegible]

きみがそうしてくれるのと同じように。

[illegible]

「参ったな、すべてお見通しと言う訳だ」

[illegible]

「ほら。やっぱり分かったじゃないか」

私はまた微笑む。

[illegible]

† † †

書斎に入るのは久々だった。

[illegible]

執筆のために使う部屋。

きみが、多くの本を読んだり、多くの思索をしたり、多くの原稿を書き上げるための部屋。言ってみれば、この所為はきみにとって[illegible]の中のかもしれない。

敢えて無遠慮に。

敢えて酒の勢いを借りながら、扉を開けて。

[illegible]

少し芝居が入っていたかな。

「本当に、出来は良くないんだ」

「読んでから判断しよう」

[illegible]

「……おや、これは」

ふと、視線が一冊の本に留まる。

本棚にきちんと収納されたものだった。

見覚えがある。これは。

[illegible]は、あれだね」

「ああ」

[illegible]

[illegible]ユラ』の初公演のことも、そう。

[illegible]

「ヘンリエッタ？」

[illegible]

† † †

「考え直さないか、ヘンリエッタ」

脚本に目を向ける。

成る程、今回の題材はシェリダンの翻案か。

[illegible]だけは考え直して欲しいんだよ」

[illegible]あるかもしれない。

きみは嫌がるだろうけれど。

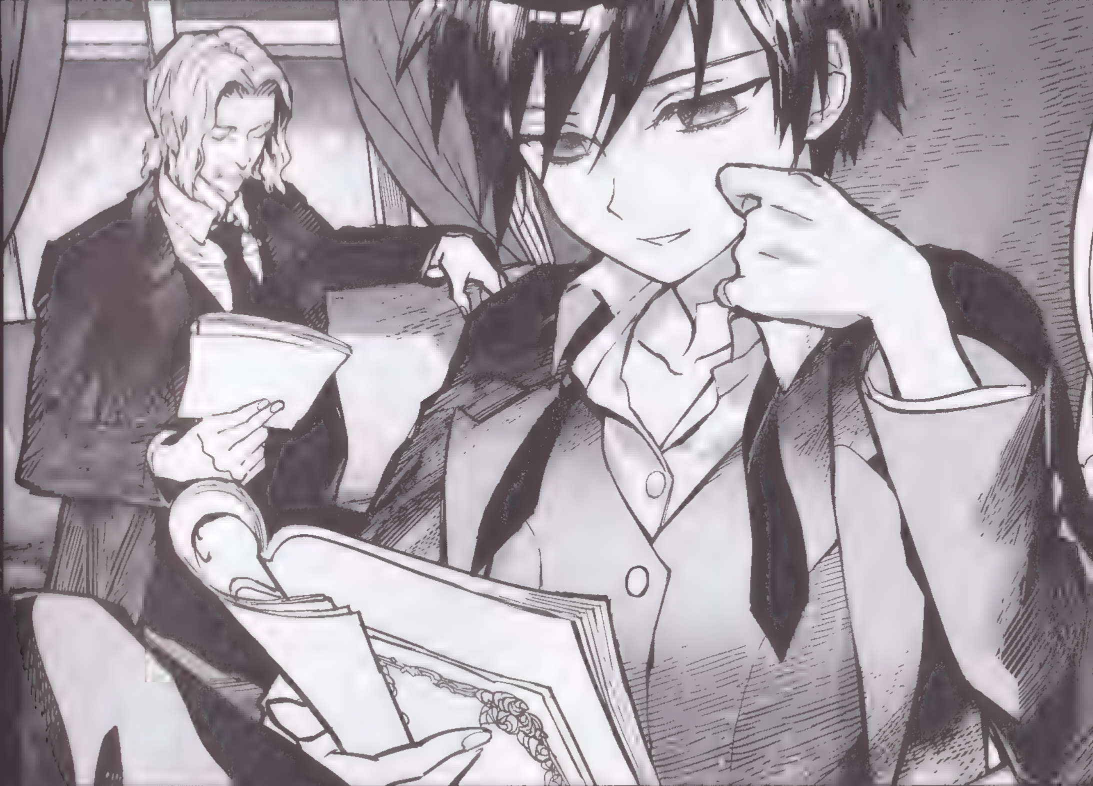
私はそれほど嫌いじゃない。

「正直に言おう。私は――本意でない脚本を書いてしまった」

頁をめくる。

[illegible]

[illegible]



作品の主要な人物である女性を男性に書き換えている、か。

構想それ自体は興味深い。

ただ、既に『ドラキュラ』を執筆したきみにこれを書かせる無[illegible]したのか、考えると少し腹が立つ。

でも、同時に。

「会う度に、脚本に対して要求をしてくるんだ。要望を述べる後援者はこれまでにもあったけれど、今回は妙に、その、日々、要求の内容が二転三転するもので……私も、途中から何を書いているのか分からなくなってしまう始末で」

男の血を求める、男。

友の血を求める、男。

原作にある上品さはかろうじて維持されているのは、きみのせ[illegible]エイブラム。

「ヘンリー。――ヘンリエッタ、聞こえているかい？」

[illegible]てみようじゃないか」

＊＊＊

きみは、三度渋って。私は、四度懇願して。

さあ。始めよう。

[illegible]

対して、私は――

「[illegible]しょう」

「いいや。夢でのみ、私たちは出会ったのですよ」

ああ。

これは、困ったな。

[illegible]の味わいを傷付けてしまっているに違いない。

それでも。

私は、この読み合わせを楽しんでしまう。

「――[illegible]」

[illegible]

ああ。うん。

少なくとも、互いに読み合わせるこの瞬間については。

悪くないと、私は思ってしまうんだ――

（了）

帝都飛天大作戦

～月山キトラ、足洗邸の怪に出遭うの事～

それは、かの白狐の面の少年が、帝都に尋常ならざる災禍をもたらしてから暫く経った頃のお話でした。帝都は下町、築地の下宿屋に若い娘一人、口に糊する暮らしの我らが猫肉屋、合言葉は貧しく清く慎ましく、窮乏してても心は野に咲く花のよう、な月山キトラ嬢でしたが、近頃暮らし向きはやや上向いてまいりました。それというのも、何時ぞや帝都に隠棲する独り大暴れ妖怪大戦争こと悪天狗……あいや、はぐれ天狗にとっ捕まったばかりか下僕たるを強制され、その身の零落留まるを知らずに思われたのも先頃までのお話で、その悪たれ……もとい孤高の天狗はそもキトラ嬢に暴虐暴戻の限りを尽くしていた筈が、なんとした心の転びようか、同嬢にはっきり愛恋を告白したのがきっかけでございました。もとよりキトラ嬢、下僕暮らしとはいえ、主が主、帝都の一等地銀座に寓居を構え好き放題な金の使いっぷりを見せていた天狗の下での日々は、それまでに触れる機会のなかった贅沢の、お零れに預かる折もちらほらあったのです。豪華客船の夜会にお伴したり、高級百貨店の食堂で洋菓子を戴いたりと、まあ色々……もっともその後で、幸せの反動とばかり、辛い憂き目を舐める事が殆どなのでしたが。

それがキトラ嬢、脱下僕して暴れ天狗……ではなく都の天狗と情人同士になった事で、ややもすれば晩のおかずにも事欠くような日々を脱した様子です。無論、心根が純朴なキトラ嬢ですから天狗に金銭をねだったりなどいたしませんとも、ただそれでも彼の為にこしらえる朝晩の食事の、具材を憚りなく貰ってこれるというだけで相当に助かります。高価な装飾品などは相変わらず固辞し続けていますけれども、甘いお菓子や良い匂いのシャボンなどは有難く頂戴するようになりました。かくて食も足りて心も足りて、恋愛の楽しさ嬉しさも知り初めたキトラ嬢は、近頃お肌の色艶素敵によろしく、目出度い限りと申せましょう。

それに、質朴な銘仙の下には、この時代の日本人女性としては瞠目モノの、並外れてたわわなお乳と豊かなお尻を元来秘めていたキトラ嬢でしたが、それがいよいよ豊麗と言いますか下世話に述べてしまえば、ひどく男好きがして何とも抱き心地の好い肉（しし）置きになってきておりまして。彼女に男の肌を教えて来、好き勝手にその肉体を弄んできた色欲天狗は前に増して情交を好むようになりあらあら大変。為にキトラ嬢、食と心は満ちても、夜っぴいて、どころか明けてお天道様が高く昇っても天狗に貪られて睡眠が足らなくなる事が頻発し、日中、猫肉の呼び売りをしている間も足取りふらふらと頼りなく、なのに腰回りに首筋に、その幼げな顔に似合わぬ色気を帯びるという態、これでは常客のご内儀に呆れられて当然ですね。

◆　◆　◆

なのでキトラ嬢、今日も今日とて休まず天狗の寓居に通う事には変わりはないにしても、さすがにせめて今夜くらいは穏やかに過ごしましょうねと房事は控えてもらう様頼むつもりです。けれどもそれでも求められたらどうしましょう、流されまいとは思うけれども押し倒されたら体が反応してしまうかもだって伽藍さんにそうされるのはいやなんかじゃなくって嬉しいし、と早、決心の土台も怪しく、銀座のビルヂング二階の天狗の住まいの扉を開けて、中の明らかに外目よりも内が広い、茫漠とした広間を一目見渡したところ、「わあ！」とたちどころに仰天して立ち尽くしてしまったのでした。

なんとなれば、平生この天狗の住まいというのは、お高そうな絨毯の上に、あちこちてんでばらばらに家財調度が散っているという、まあ小狭い長屋暮らしに慣れたような庶民には些か首を傾げざるを得ないような景色が広がっているのですが、この日については、扉近くの調度が皆奥に押しやられておりました。で、空いた床上には一面白布が敷き詰められ、まるで雪原のよう。それだけなら胸に清く涼しい眺めと言えましょうがしかし、雪原は雪原でも刀狩りの後だとでも言わんばかりに、白布の端から端からずらりと並べられたるは、刀、刀、一面の刀、とあっては、その物々しさと言ったら。拵え着けたのもあり、白鞘に収めたのもあり、数だけ見れば兵隊さんの一個大隊くらいは軽く賄えそうなくらい。中でも真ん中で、一段高い台に乗せられているのが、伽藍一番の愛刀、初代月山鬼王丸の作刀と伝わる太刀でしょう。みな鞘に納まっているからいいものの、これで抜き身であったなら、刀身が放つ冴え冴えとした冷気に、キトラ嬢、軽くお小水を催してしまったに違いありません。これだけの刀を前にして、腕組みで見下ろしているのが、キトラ嬢の元ご主人様であり今恋人の暴れ天狗……いえ、伊達天狗の黒羽伽藍なのでした。何やら考え顔であったのが、キトラ嬢の来室を認めた途端にふっと眉根を開いて笑みかけてくれはしたものの、だからと言って娘の心は休まりません。

「今日もよく来たキトラ……が、見ての通り少々とり散らかっているが」

「少々って、何ですか、刀、こんなに沢山で……もしかしてまた誰か、何かとこの前みたいな物凄い喧嘩しに行くつもりで揃えたんじゃ」

先だっての鬼人との一大闘争を喧嘩という次元で捉えているあたり、暢気なのだか案外本質を把握しているのか定かならずのキトラ嬢、ともかくどうにも武器の群れが醸し出す物騒な気配に心中穏やかならざるところ、伽藍は首を横に振った事です、幸いに。

「いや違う。そう恐れたもうな我が愛しの君よ。確かにこれらはすべて吾輩の表道具だが、ただ単にそろそろ手入れをしておこうかと、な」

「そうなんだ、お手入れ……あの、刀のお手入れって

いうと、あのちっちゃいたんぽみたいなので、ぽんぽん叩くんですよね？」
「あれは『打ち粉』と言う。たんぽの中には砥石を砕いた粉が詰まっておって、お前が言う通りあれで刀身を叩いて拭き清める。とはいえ、それはまあ単に刀身を錆びさせない為の手入れでな」
と伽藍はそこで一息入れて、
「これにあるは皆吾輩の武器であり、当然どれもこれも皆いくさ場を潜って、有象無象共を斬り伏せてきたさ。血脂などはその都度浄めてあっても、刃と拵えはそうもいかん。研ぎ直し、修繕しておかねばと、こう並べてはみたものの――」
また囁いて、キトラ嬢に注いだ眼差しの、その何とも愛おしげな、楽しげな、嬉しげな。恋人からのこの甘やかな視線に、キトラ嬢もたちまちのうちに頬が緩みそうになって、ただそこで少しく懸念が生じた、と言います。彼、次に何を言い出すつもりなのか知ら、もしかして――と。
「折角お前が通ってきたのだもの、何こんな刀など後回しでいい。まあ取り敢えずは風呂でも使おうか。また髪を洗ってやろう」
「あ、また洗ってくれるんですか、嬉しいな、あたしあれ好き――」
この頃の伽藍は、キトラ嬢の入浴に、当たり前のように一緒してとっぷりしっぽり浸かるようになっていたのに加え、何がツボに入ったのか彼女の髪を洗うことに熱中するようになりました。舶来の洗髪料に香油など駆使して髪を洗い流す伽藍の手は、これが実に小器用で巧みで、恐縮していたのも初めのうち、キトラ嬢にとっても断りがたい心地好さとなっておりました。ただ問題は、そうやって陶然と頭と半身を委ねているうちに、何時の間にやら洗う手は淫靡な愛撫の手となって、気が付くとしっぽりたっぷり体を重ねてしまう、という流れもまた確立しているのが、困らないけれども困るというかなんというか。今日は情事は控えようという矢先にこれでは、挫折が思い遣られるというもので、キトラ嬢、慌てて洗髪の誘惑を振り払います。両掌を前で振りながら、
「って、そんな、あたしの事より刀の方が先でいいですってば。だってそれ、みんな伽藍さんの大事なものじゃない。お道具は日ごろからのお手入れがとっても大切。そうしないといざっていうとき困る事に」
「む……まあ、正論とは言えるがしかしだな……」
「あたしも手伝うんで、ちゃちゃっと始めちゃいましょう！」
どうにか誘惑に流されず通せそうで、キトラ嬢、声に力を入れました。まあ、身も蓋もなく言ってしまえば、なんだかんだと伽藍と抱き合うのが心地よくて毎日通っているあたりで、今更誘惑に打ち勝つもへったくれもありませぬ。というより、いっそもう一緒に住んじまえ、というところですが、その辺りはキトラ嬢の娘らしい慎みで、嫁入り前の女が異性と同棲など憚られる、という。もう殆ど伽藍の通い妻やっている段階で、同棲への慎みもなんもあったもんじゃねえよとおかんむりの方も取り敢えずは堪えて下さいまし堪えて下さいまし。
なんにせよ、伽藍はキトラの顔や手元をしげしげ眺めて問いました。
「我が君よ、手伝おう、一緒にせむとは何とも心躍る申し出だ。ただお前、刀だぞ。研ぎや柄巻の解し直し巻直しができるのか？」
「へ……？　あの、包丁の研ぎとか、お着物の縫い直し辺りならどうにか……」
と言い差しながらもキトラ嬢、伽藍の使い天狗たちが三々五々集まりだしているのが目に入りました。恐らく刀剣群の修繕の助手の為に控えていたのでしょう。それが手に手に携えているのは、鑿や小槌や千本通し、他に名前も知らないような道具の数々で、皆がどこかしらうんざり顔、なのはこれだけの数の刀相手の仕事がどれだけの労力を要求されるか物語ります。
「殊に研ぎなどは、俗人の手なら一振りでも数日がかりの仕事にもなろう。もっとも吾輩なら、全て一晩の夜なべでどうにかしおおせるが」
と伽藍がカードを操る奇術師の手さばきで、片手を対の腕に滑らせれば、黒衣の袖にすらすら並べられた大小の砥石の数々。中には一分にも満たない微小の鳴滝砥石さえ。なるほど、この徘徊天狗は長の放浪の歳月に無駄に様々の技能と知識を蓄えているようですから、刀の研ぎでも自らやってのけるのでしょう、だとしてもキトラ嬢はそうもいきません。口元を気まずさにひくつかせつつ、ただそれでも健気でした。
「ええとそれじゃ、皆さんのお夜食とかを作ります、他にも小間使いするんで、遠慮なく言いつけて……ね？」
諦め顔で準備を始めていた使い天狗たちに呼びかければ、彼女たち、はっと顔を上げ、みな手を合わせてお願いよろしくの合図。おさんどんや小間使いだけでもよほど有難かったと見えます。だというのにそれを打ち砕く伽藍の無情な宣告。
「何を期待しているのだお前達。夜食を食わせている暇などないわ。食うている暇があれば手を動かさんか」
……キトラにはでれんでれんのダダ甘になった天狗ですが、使い天狗達にはあいも変わらずの酷使っぷりなので。皆が口々にぶーたれますが意にも介さず、伽藍はキトラに向き直り、言い出したことがありました。
「と、キトラよ。こうして刀を並べていてふと思ったのだ。お前、護り刀を一振り持たんか？」
「はい？」
「素性の良い短刀の一振りでもあれば、お前も吾輩のおらん時に心強かろうと思ってな、我が愛の女よ」
とて、すっとしゃがんで白布の上、先ほどの砥石と同じくどこからともなく、すとととと、と繰り並べましたのが、黒漆、蒔絵、螺鈿、目も絢な拵えの、数振りの短刀でして、それを伽藍は、

「さあどれでも好きなのを選べ、光代、保昌、来国光あたりがお勧めだ」
などとキトラ嬢の手に押し付けようなどしたあたり、包丁の押し売りと大差ありません。キトラ嬢、焦って押し返して、
「いい、いりませんてば！　きっと伽藍さんの事だからこれ、一身代にもなる小刀ばっかりじゃないのかな。そんなの持ちきれないし、何よりあたし、懐剣の嗜みなんてないもの。ほんと宝の持ち腐れになっちゃう……」
「いや何もお前に立ち回りせよと言っているのではなく……だが確かにそうかもな。本来の意味を考えれば、婦女子に短刀を持たせるのはどうにも潔すぎる」
きょとんと首を傾げたキトラ嬢に、どこか曖昧な笑みを向けて、伽藍は上着を取って仕事に取り掛かるのでした。

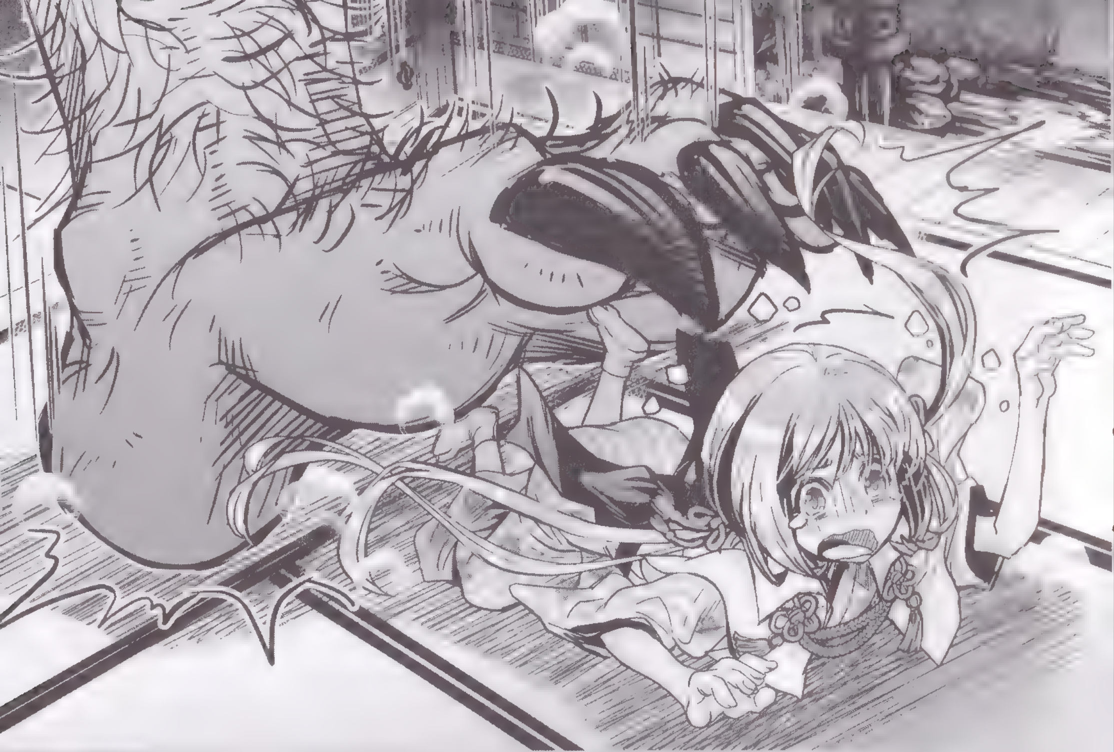
◆　◆　◆

伽藍の刀仕事の一夜から、翌々日の事。
「誰（たれ）ぞある、誰ぞある、お頼み申すお頼み申す――
なにとぞご助勢お願い申し上げたてまつる――!」
――キトラ嬢がそんな声を聞いたのは、本所三笠町、現代で言えば墨田区亀沢辺りでした。時刻は黄昏、長く伸びた影が夕闇に溶け込んでいこうかという頃合いに聞いたその声は、凛と張っていながらも、端々が不安と心細さに震え、古めかしく大人びた言葉遣いなのに音色自体はまだ声変わり前の子供の、というどうにもちぐはぐなものでキトラ嬢を奇妙な心持にさせましたが、その必死さ、真剣さは本物で、つい耳が取られます。どこからと、見まわす辺りは、帝都内でも先に襲った厄災の被害が大きかった地域の一つで、まだ復興が捗々しくなく、町並みにも無残な痕跡が目立ちます。この辺りのどうにか焼け残った家の一つに、下宿の大家の老姉が住まいしており、大家の頼みで彼女へのお遣いごとを果たした帰途で、ふと立ち止まったのは着物の襟もとの縫い糸が一筋ほつれており、それをば小柄（こづか。日本刀の鞘につける小刀）で切っていたからなので。なぜキトラ嬢がそんな小刀を持っていたかというと、伽藍との護り刀問答の時、短刀を受け取ることは固辞したものの、ならこれくらいは良かろうという事で押し付けられたから。本来なら何がしかの刀剣と揃いのものなのに、その小柄はそれ一つが伽藍の持ち物に紛れていたそうな。キトラ嬢が受け取ったのは、ずいぶんと磨り減って草臥れて見えたのと、柄に兎の象眼が施されていて可愛らしかったからで、伽藍に見合いの小鞘を作ってもらって懐中に収めていたのでした。ともかく、声の事です。必死の調子でしたし、何より子供の心細げな声とあっては人の好いキトラ嬢の事、捨て置かれるわけもなく、鳴った方へと辿っていけば、もとはどこかのお屋敷跡だったと思しき、崩れた門柱の跡の傍らで、呼びかけている小柄な姿。
「誰か、誰かおられぬか、どうか我のたっての願い、聞き届けては下さらんか――!」
どうにも古めかしい物言いで、暮れかけた通りに懸命に呼びかけているのはやっぱり子供です。ただその衣装が子供身丈ながらもしっかりした直垂で、どこやら五月人形が動き出したようで、いずれにせよ尋常とは思われません。そればかりか、近づいてキトラ嬢はぎょっと息を飲みました。頭なりに丸く短くした髪を眉上で揃え、鼻筋や口元などは何とも可愛らしい造作だというのに、両目ともが古い反古のような何かでこめかみまで塞がれています。キトラ嬢は常日頃から目隠しを着けて歩く青年を知っていますが、彼に比べてこの子のそれはどうにも痛々しい。
「う？　お……？」
やはり見えていないのでしょう、何事か嗅ぎとろうとするかに鼻先を上げ、すんすん吸いこんで。
「あの、ぼくちゃん……？　きみはどこの――」
どこの子供で、どんな折檻なのかと、不審の念よりも気の毒が先に立ち、幼児にするように優しく呼びかける、言葉の尻をぴしりと押さえて、その子はキトラ嬢にキッと向き直ったのでした。
「其許（そこもと）！　これさそこな娘、其方（そなた）じゃ其方。
なんとしたことか、仔細は知らず、其許、微かに我の匂いをさせておる。よし、どういう巡り合わせやら知らねど僥倖と見たぞ。
其許でいい、我の懇請を叶えていただこう。さ、参れ、こちらへ」
両目をべっとり塞がれているにもかかわらず、その童子はキトラ嬢を過たずしかと見上げ、ばかりか手を伸ばして手に手を取って、ぐいと引き寄せた、その有無を言わさぬ強引さ。そのままぐいぐいと、門の内の屋敷跡までキトラ嬢を引きずっていく勢いです。
「わぁ！　なな、なに、ぼく、いきなりどうしたの!?
お姉さんをそんな引っ張らないで、お話なら聞くからっ」
「我を童（わろ）扱いするでない！　齢なら其許の高祖父より上よ。話か？　話しょうとも。我が守護を任ぜられた一族の邸が、物の怪に荒らされておるのだ。が、忌々しい、我は封じられておってな、其許にそれを破っていただきたい」
――キトラ嬢は、童子を見た時から胸にきざしていた違和感に、今更ようやく気づいたのでした。この子は、見た目通りの者ではない。伽藍と知り合って来、その手の事柄にどうにも巻き込まれやすくなっている、鬼とかお化けとか、その類の「あっち側」のモノだ、と。しかし気づいた時には遅し。キトラ嬢は屋敷の内に引っ張り込まれて、混乱甚だしくきょろきょろと、すれば薄闇の中にずっと奥まで伸びる、磨きこまれた板張りの廊下、町屋よりずっと幅豊かな障子戸、柱も長押（なげし）も材が皆剛健で宏壮で、鴨井や欄間の彫細工も見事な、これは帝都がまだ江戸と呼ばれていたころの武家屋敷のような、いや、そのものです――つい先刻までは、母屋どころか門までも侘しく崩れ果てていたというのに!
「なに、これ。なんでこんなお屋敷が……」

「これ、呆としているな。こちらじゃ、奥の御書院の床柱の根元じゃ、隠し蓋が拵えてあって―――む!」
言いかけて、童子が塞がれた目をさっと走らせたのは廊下の天井へ、キトラ嬢がつられて同じく見上げるよりも早く、邸内に轟いたのが地鳴り、腹を揺るがすような、そしてその振動よりももっと深く不気味に響く声で、
『洗えええ―――!』
キトラ嬢を凝固させた瞬間に。割ける音、砕ける音、大轟音、放って天井をぶち破って突き下ろされたのが、巨大な、毛むくじゃらの、足! 造作は人のような獣のような、五本そろった足指には黒々した鉤爪備わり、そして汚れています、泥汚れ、埃汚れ、煤や黴にもまみれてかさぶただらけ、その上臭い、白癬を病んだ足の悪臭と獣臭さがまじりあって臭い、ひどく臭い、さらに声、胴間声、耳から頭を殴りつけてくる様な銅鑼声で、
『足を　洗えええええ!!』
廊下を木片破片で一面に汚し、朽ちた沈没船の様に圧する大足から声が鳴り渡り、鉤爪の指が焦れたようににぎにぎされますれば、ぼろぼろと剥がれ落ちてくるのは汚れか垢かかさぶたか、悪臭もまた一段とえぐさを増して鼻をつんとついてきて、涙が出そう。いえ実際に、衝撃に一時麻痺していたところへその悪臭で涙が滲んだ拍子にキトラ嬢は我に返りました。
「お屋敷の物の怪ってこれ……この汚れだらけの大足……? え、あ、ここ、本所……足洗邸!?」
「物の怪づれの名で呼ぶでない! ここは旗本、小宮山の邸ぞ!」
本所で、洗え洗えと迫る化け物足と言えば、かの本所七不思議の一つ、足洗邸です。これが、それなのかと後退さるキトラ嬢の前で、大足はずぅるりと持ち上がり、天井裏へと引っ込んでいったのですが、
『……洗ええ! 洗わんかぁあ…!…』の声がまた空気をどよもし―――今度は、真上でした。キトラ嬢の。細かな振動が走ったと見る間もなく、天井板が爆ぜ割れ、撃ち込まれた大足の、キトラ嬢を逃さず踏み潰す、寸前に。
「頼んだぞ、娘!」
どんと走った衝撃は上からではなく横から、キトラ嬢は突き飛ばされた勢いと痛みで、瞬間また自失して、自分のすぐそばの床板を踏み砕いていた大足に悲鳴でぎょっと飛びのきます。飛びのいて、童子の姿が消えていることを見て取って、やっと覚りました。童子が自分を突き飛ばし、代わりにあの大足の下敷きになってしまった事を。
「いやあああああ! ぼく、ねえぼく!? ああ、なんでこんな……」
涙も嘆く間もなく、大足はまた天井裏に消えていき、キトラは心臓を鷲掴みにされた心地で、廊下の上を見るのが怖い、童子がどんなむごたらしい様に成り果てたか、なんて見たくない……と、こはどうした不思議か、童子の骸はどこにも見えず、ただまた天井から脅かす声音、『足洗えええ―――』。キトラ嬢、もはや物も言わずに、背を向けて走り出したのが、出口ではなく屋敷の奥へ、であったのは、童子の頼みに応えてやりたいと念じたからなのでした。

◆　◆　◆

ですが―――せめて、とそう望んでも、当時の人間でもなければ武家の子女でもないキトラ嬢です。武家屋敷内の勝手など当然知るはずもなく、奥の書院と言われても、そもどっちが奥やら書院やらの別さえつかぬキトラ嬢です。
『足を洗うのだあああ』
「いやあああああ～～～っっ!!」
『洗わんかあああああ!』
「やめてえええ～～～っっ!!」
轟音物凄まじく、廊下であろうが座敷だろうがお構いなしに天井をぶち抜いてくる大足に追い立てられ、逃げる、必死で逃げる、着物の裾が割れるも気にしている場合ではなく、両腕を振り立て逃げる、障子戸を潜る、廊下を抜ける、座敷を走る。する内にいよいよ自分の位置を見失ってまいりました。大体もし大足の言う通りに洗おうにも、湯水やたわし手拭の用意もなく、そもそも大足だって洗え洗えと急き立てるばかりで、キトラ嬢の心変わりを待つ様子もないのです。
逃げ惑ううち、入り込んだ座敷には縁側が巡らされ、やれ嬉しや戸の向こうには庭が見えております。この大足、屋の内にあってこそ出現が叶うものであり、開けた空の下で突き下ろされたという話は聞きません。キトラ嬢はまずはいったん外に出て、息を整えようとした、そこに。
『洗え　洗えええええええ!!』
「わっきゃああああ!?」
前に飛び逃れようとして、なんという事か、足袋のつま先が畳の縁に引っかかってしまい、体が前に投げ出されてしまいます。そのすぐ後ろで畳を踏み抜かんばかりに叩きつけられた大足は、獲物を逃したと見るや速やかに引っ込められて、またすぐにキトラ嬢を襲うのでしょう。だというのに彼女は転んだ弾みに息が詰まってしまって、立ち上がろうにも立ち上がれず、
「かっは……けふっ、けふ…っ、ひゅー……っっ」
もがく、目の端に涙がひりひり沁みます、前合わせは乳房の膨らみに内から乱れ、力なく床にあがく、足袋の足裏の清い白さが、薄闇の中に悲しく浮かび上がります……痛くて、苦しくて、怖くて、厭で、悲苦の黒汁に塗りつぶされそうになるキトラ嬢の、心に浮かんできた顔を、夜の底で求める標のように呼びました。
「はぁ……あぁ……伽藍……さん―――」
呼ぶ声を圧し、諸共に押しつぶさんとする化け物足がまた天井をぶち破り、叩きつけられ―――
「呼んだか? 求めたか? 望んだな、助けを?
よって吾輩は応えよう、我が愛の娘に、その呼ぶ



声に！」
　ばさりと舞ったは、天井の破片ではなく、黒い羽の一片、二片、キトラ嬢の背には大足は触れません、触れる事は許されません。黒衣の男が彼女のそばで立ちはだかり、六尺棒でもって不潔な足裏を突き返していたから――――
「……剣先で突き抜いてやりたいところだったのだがな。しかしこの汚れ足では剣が穢れてしまうわい」
　不遜に唇の端を吊り上げ、嗤う伽藍は、自分に幾倍する嵩と目方の大足を、しかし事もなげに留め、押し返していたのでした。
「で、キトラ、どういう次第だ、これは」
「あ、あたし……男の子に頼まれて、奥の書院の床柱に、何かあるらしいの、それを――――でも、どこがそこなのか、ちっともわからなくって……っ」
　ふむ、と伽藍は、キトラ嬢の要領を得ない説明ではあるのに、心得顔で、
「大体わかった。奥の書院だな。この手の武家屋敷の造作なら、大方承知しておる。それではキトラ、お前の心象にここの見取りと道筋を念写してやろう」
　と伽藍の眼光が微かに、不思議に光ったと見るや、キトラ嬢の脳裏に明確に浮かび上がったのが、この屋敷の間取りと現在いる座敷と奥の書院の位置とそこへと至るための道筋でした。ここまで明瞭に示してあるなら、もとより呼び売り仕事で細かい路地を覚えるのに慣れた彼女です。息の苦しさもおさまり、何より天狗が来てくれた事の安堵で、キトラ嬢の体に立ち上がる力が戻りました。
「あの、伽藍さん、ちゃんとした訳は後で言うから」
「構わん。お前がこの手のモノ事に巻き込まれやすいというのはいい加減理解しているさ。さ、行きたまえ我が心優しき君よ。お前に頼まれた事なのだろう？
　このあぶら足は吾輩が遊んでおいてやろう」

◆　　◆　　◆

　奥の書院の床柱、根元に隠し蓋と聞いていても、キトラ嬢は探し当てるのに手間取りました。それでも柱の根元をあれこれ弄り回しているうちに、ぱたんと、ばね仕掛けだったのでしょう、一部が開いた時の嬉しさと言ったら。覗き込んで暗くてわからず、こわごわ手を差し込み、触れた感触は織布、引き出せば錦袋です。それも短刀と思しき一振りを包んだ。紐を解いて袋を払えば、六寸ほどの黒漆に月と秋草を蒔絵した合口拵えの、やはり短刀、美しい。ただ奇妙な事に、鞘と、鍔・柄の合わせがべたべたと古い反古で貼られ封じられ、これでは刃を抜く事は叶わないでしょう。封じられて……とそこで彼女の耳の中に、蘇る声がありました。あの童子の声。
　――――忌々しい、我は封じられておってな、其許にそれを破っていただきたい――――
　封。守護。破る。不思議な童子。一連の事柄が心の中で繋がったような気がして、キトラ嬢は短刀の封を剥がしにかかりました。けれどよほど強い糊なのか、いっかな爪が立たず、焦れてキトラ嬢は件の小柄を取り出してその刃先を反古に突き立てました。

鞘に傷つけないよう、鯉口の縁に沿ってできる限り慎重に。どうにか仕おおせて、そっと鞘を払います、と、すらすらと展開されていった刃文の、水のような美しさ。その彼女の手をそっとくるみ、解き、短刀を優しく引き取った手がありました。小さな、子供の手。
「―――忝（かたじけな）し」
あの直垂衣装の、眉上で切り揃えた髪の。姿形に傷は無し、大足の下敷きになったはずなのに、何ら損なわれもせず。ただ一つ、明確に違う点がありました。童子の両目を塞いでいた反古が失せています。露わになったその双眸は、黒目勝ちなのが可愛らしく、かつその澄んだ眼色と涼しげに冴えた眦が凛々しく。
「ぼく！　無事だったのね、良かった、でもどうして、どうやって？」
「なんの、我があんな物の怪づれに害されるものかは。ましてな、娘、封が破られ刃が抜かれた今となっては、最早あの腐れ足ごとき、物の数にも入らぬ」
凛然と言い放ち、童子はキトラ嬢の膝元に置かれた小柄を認め、何事か頷きました。
「ああ、成る程。そういう道理であったか。
……娘。其許には感謝してし尽しきれぬ。事が済んだ後、我と、そこな刀子を合わせて、御身に捧げん。もって此度の恩に報いようぞ」
小柄を取り上げ、短刀の鞘の、櫃（ひつ）に嵌めれば、まるでその為に誂（あつら）えられていたかのようにぴたりと、いいえきっと、そこは始めからそのための窪みだったのでしょう。
「いざ、参る！　魔障―――調伏!!」
して童子は高々と跳び上がりざま、天井板を刃で矩形に斬った、その手の早業は銀光、切り抜いた穴から天井裏に入り込み、あっという間もなく姿を消してそして、ものの数瞬と掛かりませんでした。キトラ嬢が後にしてきた方、伽藍があの大足を留めている座敷の方から、けたたましい、怪しき獣声が迸ったのです。断末魔の声と見えて、長く伸びてふっつりと消えました。

◆　◆　◆

「……本所七不思議、足洗の怪は、味野岌之助（あじの・きゅうのすけ）という旗本の屋敷で起こったとされている、が、一説には小宮山という家だった、ともされている」
不明の獣の断末魔が絶えた時、キトラ嬢は白々とした月影の下、屋敷の跡に立っている自分を見出しました。あの武家屋敷は今や影も形もなく、夢、幻の類だったかと思いきや、あの短刀が、鞘に戻って彼女の胸元に差し込まれていました。確かめるように押さえた時、これもいつの間にか傍らに立っていた伽藍が語り出しました。
「その後旗本屋敷は主も変わり、姿も変わりしたが、そこが、ここだったのだろうな」
「どういう事なんでしょう……」
「先の一件でぶち壊されて、この辺り、現在という時の地層が剥がれて過去の時代の層が露出したのだろう。過去の情景の再現だったのだろうな、お前が入り込んだ屋敷と、あの大足は」
伽藍は、キトラ嬢の胸元から、短刀をすっと抜いて、懐から取り出した小道具で目釘を抜き、柄から茎（なかご）を外しながら、
「足洗の怪によって、その旗本は屋敷替えを余儀なくされたと聞く。つまりその短刀は、怪を払えなんだ、ということになる。お前の話を聞く限りでは、封じられていた為に。だから、過去の情景の繰り返し、せめてもその中でだけでも、これは己が役を果たす事を願ったのだろうよ、護り刀としての」
何故護り刀として秘蔵されながらも封印されていたのか。どうして小柄だけが流出して伽藍の手元に納まっていたのか。全てが判然となった訳ではありませんが、天狗はそれ以上は推し量ろうとしませんでした。なんにしても、刀身を月に翳せば、平造りの、寄せる波のような刃文の中に、霞のような匂が湧き立って、得も言われぬ、その姿の佳さ。
「ふむ……地鉄は板目に杢目を交えて強く錬れ、地沸厚く付き、肌目が鮮明でざんぐりとした景色を呈し、刃文は尖り互の目を主調に逆がかった刃を交えて広狭あり、表は玉や島状の跳び焼があり、棟焼もあり、所詮『皆焼（ひたつら）』となる。して、銘は―――常陸守藤原信舎（ひたちのかみふじわらのぶいえ）作。関七流三阿弥派だな」
「あの、ええと、ごめんなさい。あたしには、刀の言葉とかよくわからなくって……」
「別に構わん。見た通りの、出来が良い刀という事だ、我が女よ。だがもう少し語ってやろう。これを作った信舎という刀匠は、武田信玄のお抱えだ。一時信州に住んでいた時期がある。そして足洗邸の旗本を小宮山だとすれば、その流れは信州小宮山、元は武田家の家臣である……信州の刀鍛冶に、信州出の侍。出自も辻褄が合ったな？」
伽藍はキトラ嬢の前合わせに、短刀を戻してやりながら、
「しかしキトラよ、吾輩があれだけ薦めた護り刀は受け取らず、なのにこんなところで手に入れる、か。いささか癪だが、まあそれでいい。刀は、自分が好きなものを選ぶのが一番であるによってな……。慶長年間の、良い鉄だぞそれは。今度手入れの仕方を教えてやろう」
慶長と、言えば三〇〇年は昔の事。そういえばあの子は、自分の事をあたしのひいひいお爺さんより年上だなんて言っていたけれど、それは本当の事で―――キトラ嬢は、初めて自分のもとにやってきた刃に、未だ実感がわかず、またそっと胸元を押さえた、と言います。

～月山キトラ、足洗邸の怪に出逢うの事・了～

航海録

／アルバトロス　こうかいろく

燃える石炭（すみ）の、鼻喉の渇き催すような油臭さと、瀝青（タール）の揮発性ながら粘り気のある臭みと、加え、潮の微かな生臭さとが混淆された、軍艦に特有の匂いが淀んでいるにもかかわらず、聖堂の筆写室のごとき静謐、そして清新が垂れ込めている、そんな一画であった。そのひそまった気配は一画に積み込まれ、丁重に細心に梱包されている品々に起因していよう。いちいち被布に折り目正しく包まれたキャンバスの数々。その数は大小取り混ぜて四〇〇点近くにも及ぶのではなかろうか。

大海原を往く艦の、雑然かつぎっしり密な船倉なのに、他から特に分けられたような、静まった一画である。であるのだが。キャンバスの中でも大判の、五〇号超えの画を包んだ被布が、手繰り寄せられはらりと垂れ落ちたに露わになった時、一画には不思議な艶めかしさが匂い立つ。

被布を引いたのは、白い腕、白い肉。

曝け出されたのは、豊麗な西洋婦人の画図。寛雅に寝そべった、一糸まとわぬ、美しい肢体の。

そして裸婦画の前でも。さながら画中からうつつに引き写したかの様だった。よく似通った姿勢だった。何より、生身であるのに、画中の婦人と同じくらい、肉の重さと生臭さが希薄で、ただ若い娘という存在の麗しさのみを抽出したかのよう。綺麗に膨らんだ乳房も、優しい柔らかさの下腹も、四肢も何もかも、恐らくは天の、企まぬ巧みさのみが為し得る造形美で、精緻精妙を極めた。殊にその面差しの美しさと言ったら、人外の異域に住まい遊ぶ、精霊にも比すべきで。

娘が、引き剥いだ被布で腿を覆えば、流れる髪の、一筋一筋は翡翠を溶かして透けるような、が、重ぬれば、船倉に何処からか差し込む弱光の下では摺墨と、色合いは黒く深まった。黒曜石の黒さと、優る深さの双眸は、緩慢な仕草と好くそぐい、どこまでも透明で、およそ感情の色というものがなく、軍艦の、船倉の一画に裸身の娘が横たわるという異様な状況でありながらも、不思議な説得力を持たせていた。だが、たとい目の当たりにする者あったとしても、航海中、洋上に現る蜃気楼と同じ類の幻影として看過を自ら課したに違いない。およそまともな船員であるならば。だが、船にいるのは船員ばかりではなく。船客もあろう。事実この艦には、自国へと回航する日本帝国海軍士官と仏国人の船員他、駐日の仏国人家族を客と乗せていた。

とはいえ———双眸を揺蕩わせる娘に今、声をかけたのは。

「　　さて。航海中、その覆いを取って、麗しの貴婦人と面会していいのは僕だけだと自認していたのだがね」

海軍士官でも乗組員ではなかった。

洒脱なリボンタイ結んだ襯衣（シャツ）を、身に吸いつくようなベストで締めて、足回りは膝丈のニッカボッカーと、軽快ながらも典雅な身なりは、一見身分ある船客とも取れて、ただその、国籍不明の顔立ちと、知性と稚拙無垢さを同居させた目つきが、彼をまともな客には見せなかった。娘は細工物のような眸で、一画に何時しか踏み入ってきていた青年を一瞥して、脳裏を探る。この艦に乗り合わせる者は全て彼女の知る処である。何しろ彼らは彼女の「内に」ある者たちなのだから。だというのに、この胡乱な青年をこれまで認識した事はなく。だから娘は問うた。

「誰なの、君は、何者」

しかし青年に答えはなく、どころか逆問いの。

「君こそ誰なのかな。軍属でもまして船員でもないだろう。かといって駐日仏蘭西人達の一員というにしちゃ、番水臭さがない。一体君は何者なんだい」

「私は———私の羽は三本マスト。メインとフォアとミズン。風一杯に受けて海を翔ける。

私の心臓は、九基の円罐と、二基の直立型二段膨張式二気筒の機関。すみを燃やして脈打つわ。

私はふらんすで生まれて、今、自分の国へと帰るところよ、日本という名の島国へ」

色硝子を引き延ばすにも似て声も滑らかに、語った偶像はしかし常軌を逸しているとしか言えなかった。人が己を語るというには文脈を外しすぎていた———というのに、青年はさも腑に落ちた様に打ち頷いて、

「ああ、君のような気配にどこか覚えがあると思ったら。僕がこれまで乗り込んだフネには、その全てとは言わないけれどもその存在の精髄、核ともいうべきモノを顕現させるのがあった。それは———船霊、船魂と言われるべきモノで。

君は、この艦の、それなのだろう」

青年自身はいかにも理に落ちたような口ぶりながら、台詞はどうにも奇矯な、何を絵空事を語ると失笑必至だというのに。娘はいとも事無げに、判りきった事実と言わんばかりに、告げた。

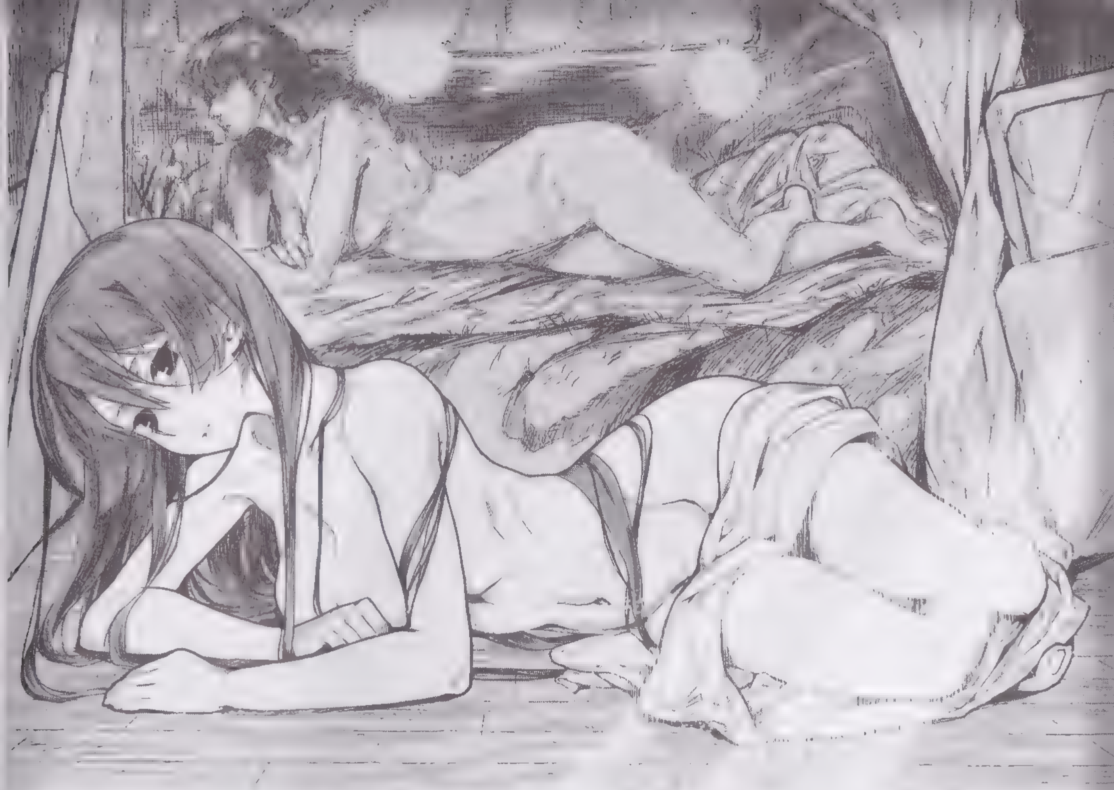
「そうよ、ええだから、私は畝傍というのよ。まだ出来上がって間もない防護巡洋艦の」

それは、まだ明治の頃の日本からの発注を受けて、仏蘭西で造船された軍艦の艦名だった。三本檣バーク型の機帆船、防護甲板を主防御とした ——

「それで、まだ聞かせてもらっていない。私は畝傍だけれど君は？」

「僕は自由な旅人なのだね。ただ口さがない者には、密航者などというやつもあるが」

「ああ、あなたが、そう。密航者、そういうものか。私の語彙にはもちろん記されているけれど、初めてよ、見て、喋るのは。密航者というのは、そう名乗って、そういう恰



好をしている、と……ともあれ、艦長に報せてやるべきでしょうね。君の事を、法規通りに」
　船霊の意識の中において、密航者というものの形式が、眼前の青年の言動と恰好を手本に、かくのごときものと、まさしく規定された、されてしまったのだった、この瞬間に。
「よしてくれよ。君の様に美しい子が、告げ口なんて無粋な真似は。それに無害な旅人の一人や二人、懐に匿ってやるのが良い女の条件というものだし、なにより、同じ貴婦人に見惚れた仲じゃないか」
「同じひとに見とれた?」
　身を起こし、おんもらと白き乳房に緑の黒髪を零しながら目問いの。
「その画の画家は、洋画に関してまだまだ未開の日本にしちゃ、筋が良い。何とも麗しく、女性美を描き出している。だから、君も同じポーズを取って見たくなったんだろう?」
「そうなのかしら?　そうかも知れない」
「そして君も綺麗だ。画に負けず劣らず」
「―――――」
　沈黙で受けて船霊は、密航者にと秀麗な眼差しを置いて、ただ静かに見つめ続けて。どれだけの時が無言の谷間に流れたのかは知らず、ただ何時まで経っても、艦の者がこの一画に駆けつけてくる足音は聞こえなかったのであった。
それは、この艦の船員には、生まれたばかりでまだまだ未熟な船霊の声を聞き分けられるほど、耳聡い者がいなかっただけ、に過ぎなかったのかも知れないけれど。
「……誰も、来ないようだな。僕の乗船を認めてくれたって受け取ろう。なら僕は君を言祝（ことほ）ごう。自分で言うのもなんだが僕は、とにかく幸運な旅人でね。僕が今まで乗った船は、これまで一度も嵐や時化に見舞われたことがない。だから君のこの航海も、きっと順調に終わるだろう。これが僕からの祝福だ」
「そんなのは、なくったって。君からの曖昧な祝福なんてなくても、私は私を沈めさせたりなんかしないもの。だって私は、私を生んだ願いに、まだ何にもこたえていないのだから」
　まだ幼い船霊の、表情は変わらず、それでも声に意志らしい意志が初めて通って、そう告げたのだった。
　―――けれど。けれど。この幼い船霊の決意と、胡乱な密航者の祝福は。航海の行く手にあって砕かれる事になる。
『防護巡洋艦畝傍。仏蘭西から日本への回航途中、謎の消失を遂げる。現在に至るもその原因は判明せず、船体の行方も不明である』

信天翁航海録外伝・防護巡洋艦畝傍、回航航海編・了

ガチゆる ヒーローバトル 姫巫女

遥「ども、ガチゆるヒーローバトルのヒロイン、砂倉遥と」
俊夫「主人公の高畑俊夫ですー。で、ですね、このコーナーは芦原市の財政を救うため、ハプニングを餌に『ミコミコ動画』のスポンサーを募集しようというプロジェクトだったのですが……」
遥「ですが？」
俊夫「前回募集したハプニングつきバトルスポンサー募集企画、なんと投稿が１通しかきませんでしたっ！」
遥「ありゃー」
俊夫「ど、どうしよう……　このままでは僕の公僕としての評価が……　今度のボーナスが……　そもそも等級ががくんと……　おおう、おおおう……」
遥「や、頭抱えてるとこアレなんだけどさ、こんなキチガイみたいな企画に、投稿があっただけでもありがたいってもんじゃないの？　普通来ないでしょ、こんなもんにスポンサーなんて」
俊夫「そ、そうかなぁ」
遥「そうそう。それに投稿がない方が、あたしは変なハプニングとかしなくてすむわけだし、俊夫の仕事も給料と一緒にちょっぴり減って——」
俊夫「ちょっぴりじゃないよ、ガッツリ減るよ！」
遥「知らないよ、そんなこと！　とにかくみんなハッピー、問題なしってことでこの話はおしまい！　届いた投稿も見なかったことにして、これからは極々まともな芦原市観光案内に切り替えるってことで良いんじゃないかな！」
俊夫「えー……　いいのかなぁ」
市長「話は聞かせてもらった。諸君、このままでは市の財政は破綻する！」
遥「！！」
市長「財政は破綻する！」
遥「や、２回言わなくても良いですから！　今度は一体なにをやったんですか？」
市長「公用車を一部変更しただけなんだけどなー」
俊夫「変更って……、オロチをですか？」
市長「や、一部の車両だけだよー　ちゃんとオロチも残ってるから大丈夫だよ」
俊夫「別にオロチは全部無くなっても僕は良いんですが、っていうかむしろ全部ハイエースにかえて欲しいくらいなんですが……なにに変えたんです？」
市長「デ・トマソ・パンテーラＬ？」
俊夫「古っ！　そして高い！」
遥「え、高いの？」
俊夫「そりゃまぁスーパーカーなんて、高いに決まってるでしょ」
遥「市役所の公用車にスーパーカーって……　なんでそんな車を買うことにしたんですか！」
俊夫「や、それは聞かなくても良いんじゃないかなー」
市長「うっへっへっへ……　くるみたんにおねだりされちゃって」
俊夫「ほら」
遥「おおう……　なんかあたし、市長さんと火野さんのせいで、いつも貧乏くじひかされてるような気がするんだけど……」
俊夫「僕も」
市長「やー、実は昨日、子供の頃のスーパーカー消しゴムでレースした話でもりあがっちゃってなー　知ってるかね、スーパーカー消しゴム。あれをＢＯＸＹのボールペンで弾いてレースする遊びやったことあるだろ？　ない、あそう。まぁともかくそのレースなんだかね、色々テクニックがある訳なんだよ。ワシは消しゴムに蝋を塗る派だったんだが、くるみたんは火で炙ってゴムを硬くするタイプでなー」
遥「や、あの、その情報は全然いらないって言うか、まったく興味ないんですけど。だいたいその話がどうしてデ・トマソ・パンテーラＬなんて車を買うとこに行き着くのかが、さっぱりわからない……」
市長「ああ、それなら簡単だ。２人とも当時使っていた消しゴムがデ・トマソ・パンテーラＬだったんで、懐かしいから実際に買ってみたって訳だなー」
俊夫「市の予算でですか」
市長「ワシが必要なモノを買うのだから、市の[illegible]を使うのは当然だろう。ルイ１４世も言っているぞ。確かなんか言ってた、うん。だからワシは悪くない」
俊夫「は、はぁ……」
市長「まぁそういうわけでだ！　我が芦原市はこのままだと滅亡してしまう！　それを防ぐためにも、今回来た投稿をじっくり綿密に丹念に取り扱い、次回以降スポンサーになってくれる人々を増やすのだ！」
俊夫「は、はぁ……　了解しました」

■水戸天狗党様からの投稿ですよ

市長「では早速だが高畑君。我が市の救世主になってくれるであろうスポンサーの紹介をしたまえ」
俊夫「は、はい。えーっと、スポンサー名は『水戸天狗党』の方だそうですね」
遥「あ、投稿してくださったのは、ＰＮ　猫井[illegible]さんです。猫井さん、どうもありがとうございます！」
博士「水戸天狗党と聞いて来てみたわけだが！」
俊夫「博士？水戸天狗党のことをご存じなんですか？」
博士「や、特には知らないがな！」
俊夫「なにしに来たんですか……」
博士「このタイミングで出ておかないと、もうこのコーナーに登場できないんじゃないかと思ってな[illegible]」
俊夫「は、はぁ」
遥「俊夫俊夫、この人頭おかしい系の博士なんだから、まともに取り合っちゃダメだよ」
博士「じ、実の父親を捕まえて頭おかしい[illegible]言いぐさだな！」
遥「実の娘を改造するようなヤツを他に[illegible]いのよ！」
博士「な、なんだとう、確かに私は[illegible]てを犠牲にする男だ。しかし、それも[illegible]歩と調和の為に行っている事。ならばむしろ進んで改造手術を受けに来るのが娘の役割ではないのかね！」
遥「あー、はいはい。起きたまま寝言はやめてくださいねー。で、水戸天狗党の人たちがアピールして欲しいことってなんなの？」
俊夫「投稿には『天狗納豆をアピールして[illegible]年の歴史を世間に知ってもらいたい』って書いてあるね」
市長「なるほど、納豆で[illegible]か。なかなか味なマネを……」
遥「そうかなぁ」
博士「よしわかった！　そういう事なら[illegible]では早速、そのための改造を施そうではないか。[illegible]ぞ遥！」
遥「お断りよ！」
博士「な、なんですと？」
俊夫「あの、博士、ちなみにどういう改造を施すつもりなんです？」
博士「決まっているだろう。納豆を使って[illegible]をアピールするための機能だよ。具体的には[illegible]

大幅に改造して、食べたものがみんな納豆になって排泄されるという機能だな」
遥「死ね！」（殴打）
博士「ぎゃー」
遥「ぎゃーじゃない！　実の娘にそんな破廉恥な機能をつけようだなんて正気？」
博士「か、科学に犠牲は付きものだからな……　それにあれだ、洋食を食べても納豆になって出てくるわけだから、体内で尊皇攘夷が常に行われている状態になるわけだ」
市長「自己完結した尊皇攘夷ということか。相変わらず素晴らしいなキミは」
博士「ええ。コンセプトは『食べて尊皇攘夷』です。遥がもりもり食べてモリモリ出すところを公開すれば、新しい観光名所にもなると思われます。なので予算を……」
俊夫「だ、だめですよ、そんなの！」
博士「なぜだね？」
俊夫「モリモリ出すところなんか公開したら即逮捕ですよ僕ら！　そういうのは夜中こっそり自宅で鑑賞するから良いんです！」
博士「ああー……　実際に特殊な性癖の持ち主から言われると納得いくな」
市長「そういえば高畑君はそういう人だったな」
遥「えー……　俊夫最低……」
俊夫「え？　や、違いますよ？　僕そういう趣味じゃないですよ！　ちょっと！？　ねえ」
博士「まあ投稿者の希望するシチュエーションも「納豆風呂で全身ネバネバですよ！」とあるからな……俊夫君の性癖に合わせてモリモリ出すのはヤメにしておこう……」
俊夫「うう……　違うのに……　そういう癖はもってないのに……」

　というわけで「水戸人狗党」の希望に合わせたハプニングが右端に載っています！

市長「茨城征服の時はこのイベントだな！」
遥「ええー……　あたしこんな格好するんだ……」

■募集要項

　芦原市ではミコミコ動画を盛り上げてくれるスポンサーを募集しています。
　CMなどはありませんが、代わりにハプニング枠を用意していますので、アピールしたいものと、もしあれば希望するシチュエーションの内容をご記入ください。
　アピールするものなんかは無いけど、特殊な性癖を満たしたいという方も、どしどしご応募ください。大抵のことは姫巫女銀河が体当たりで実現します。
※このコーナーは芦原市の魅力発信並びに市への愛着を深めることを目的としていますので、グロ系のイベントは禁止とさせていただきます。

○投稿の例
《スポンサー名》
　牛追い祭り好きの男

《アピールしたいもの》
　牛ですよ、牛！　それ以外ないでしょ！

《希望するシチュエーション》
　ファラリスの雄牛的なものにも惹かれますが、グロ禁止らしいのでやっぱ角に引っかけられて服が破けっちゃうのがいいかなー

《その他》
　日本でも牛追い祭りを！



Kanou@Mac

カノー・アットマック

■ 艦これとか、とうらぶとか、城プロとか。

俺タワーの黄金の竜神『バケットチェーンエクスカベーター』さんが良い。たまらない。

「バケットチェーンエクスカベーターって何？」と思われた方、アレです。世界まる見えやディスカバリーチャンネルの巨大重機特集などでよく扱われている、ハウルの動く城みたいなのにクレーンのついたドデカい奴です。分からなければ検索してください（ぶん投げ）。まあ、私は入手してない系親方なのですが……。レベリングゲーは時間がいくらあっても足りない。そういう意味では艦これは３年目に突入しているだけあって極まり始めた感じがしますが、これって一般に「クソゲー」とされる格闘ゲームが、一部のマニアによって煮詰められ「バランスが良い」と呼ばれる感覚と同列のものだろうなぁ（非常に伝わりにくい例え話）。

さて、ナウなヤングにバカウケのトレンディな話題はこれくらいにしまして。前回はラブライブでしたので、今回はオールディーズなアイドル作品に触れてみようかと……思っている内にアイドルマスターシンデレラガールズ（以下デレマス）のアニメが始まってしまいましたよ！　デレマスはほぼノータッチながら、周囲のＰより勝手に流れ込んでくる情報のおかげで、ベストアルバムを購入するに至り、ちゃんみおさんの軌跡に胸を打たれながら「ミツボシ☆☆★」を聞くに至っております。りゅうせーい！

全く関係ないですが『六ツ星きらり』という美少女ゲームの主題歌が『☆☆☆☆☆☆』という、読み方がサッパリ分からないタイトルだったのを唐突に思い出しましたが、分かる人いるのかなぁ……閑話休題。デレマスアニメはバハムートGENESISに続き毎週楽しんで観ております。今後どのような展開を見せるのか、楽しみで仕方ありません。アイマスももう１０年だものなぁ。大泉学園までやりにいっていた頃が懐かしい……と、アイマス関連はまだまだ盛り上がっておりますが、次のアイドルゲーにも目を向けるべき。注目株としましてはナナシスことTokyo 7th Sisters辺りなのでしょうか。ツイッターのタイムライン（局地的）を眺めているところ、スースさんやムスビさん人気が高い感じでしょうか。分かります。……と、過去から最新のアイドルゲーにまで強引に触れたところで、今回はここまでとさせていただきます。

最後に自著の宣伝で恐縮ですが、2月の27日に『ロード・トゥ・ドラゴン（上）～actual blue～』が一二三書房様より発売となりました。書店で見かけましたらば、お手にとって頂ければ幸いに存じます<(_ _)>　それではまた来世！

（文責：加納京太）

禾刀郷（のぎふなさと）の ライアー★カクテルコラム

スクリプターの禾でございます。何やら昨今、名刀の付喪神をお供にした歴史守護者の方々が大機関都市ニューヨークやロンドンへと誘われる事例が増えているようですが、大変有り難い事です。

断章：ブルックリン　Fragment Chap. The Brooklyn

『紫影のソナーニル』になぞらえたカクテルレシピ連載もようやく３回目。早速参りたいと存じます。

《東の赤王》ヘミングウェイの支配するザ・ブロンクスを後にしたリリィとA。２人を乗せた一輌だけの地下鉄はクイーンズブリッジの途上、『ブルックリン』街区で停車します。そこで彼女たちはある騎士と少女との、忘れ去られた愛のメモリーに接するのでした。

「ここはブルックリン。忘れられるべき土地。誰も、ここに足を踏み入れてはならない」

《ブルックリン》 Brooklyn

ライ・ウィスキー	2/3
ドライベルモット	1/3
アメールピコン	1dash
マラスキーノ	1dash

☆シェイクしてカクテルグラスへ

街名を冠したいわゆるシティ・カクテルの１種です。アメールピコンはリンドウやオレンジ果皮等を使用した薬草リキュール。通販でも入手可能ですが、風味づけ程度ですので、自作派や在庫のないバーではオレンジビターズ等で代用しても宜しいかと。

ライウィスキーは軽やかなカナディアンの『オールドオーバーホルト』より、深みのあるバーボン『ワイルドターキー・ライ』の方が『ブルックリンの騎士』のイメージには相応しいでしょう。

《ランバージャック》 Lumberjack

キルシュワッサー	3/5
オレンジキュラソー	1/5
オレンジジュース	1/5

☆シェイクしカクテルグラスへ

リリィの守護者にしてAの影の一柱、クリッター・ランバージャックの名を冠したカクテルです。オレンジとチェリーの果実香に油断すると、強烈な酒精に一刀両断される事請け合いです。

キルシュワッサー（チェリーから蒸留される無色のフルーツブランデー）は製菓素材としても有名です。チェリーブランデー（濃赤色のリキュール）とは全く別物ですので自作の折はお間違えなきよう。

大変マイナーなカクテルですので、バーでご注文される際にはレシピもお伝えください。

女王の言葉を借りて　来たれ、
我が影、我がかたち

次回は『クイーンズブリッジ』をイメージしたカクテルをお送りする予定です。
引き続きお付き合い頂けますよう。それではまた。

LETTERS AND POINTS

おたよりコーナー

○ ANGEL BULLET 他

『最近ちょっと昔めの作品プレイし始めたのですが個人的にANGELBULLETがめちゃめちゃ好きです。昨年10周年でしたが何かないのかなとほんのりお待ちしております。七橋やっててビリーとクゥ・クラン似てませんかと思い。女たらし悪党とかお友達にジェーンさんいるとかロリコンとかマフラーの色合いとか。まだ新しい作品には手を出せていないのですが今までやった作品は全部面白かったのでライアーソフト内で何か懐古的な企画がなされたら嬉しいなと思っています』
1+9p（4610・201）

イラスト付きの投稿をありがとうございました！



素敵なイラストありがとうございます！　今回の特集でエンバレを知らなかった人も興味を持ってくれれば嬉しいですね。【しまさら】

○屋上の百合霊さん

『ドラマCD「九星ラジオ」聞きました！　放送部たっぷりで満足です！ 音七と沙紗の漫才が思いのほか楽しかったです。羽美と沙紗のカップル的なところも見たい聞きたいとは思いますが、やっぱり3人一緒が一番ですね。ぜひいつまでもまだつるんでんの一、とか言われててほしいです。
そして待ちに待ったサントラ、しかも曲紹介付き！　サチさんすてき！ ありがとうございました！』
1+4p（4019・もっち）

百合霊さんへの応援ありがとうございます。皆様の応援と社内外の協力のおかげで何とかドラマCD完走できました。サントラに関しましても、変則的な形ですがお届けできたのは嬉しかったです。【しまさら】

○ガチゆるヒーローバトル 姫巫女銀河

『本編と外伝ともにクリアしました！が、ゆるキャラがだんだん危ないのになっていくあたりが、久々にライアーさんを感じました！おかげさまで外伝のあの人や動物のあの人とかだんだんゆるキャラに思えてきました…』1+4p（3789・B.B.）
最近は現実のゆるキャラも危ないのが増えてきて、なんだか妖怪と区別がつかなくなってきたような気がします。時計ＧＵＹとか酷い……【天野】

○帝都飛天大作戦

『帝都飛天大作戦の発売、おめでとうございます。まさか希企画で（わりと）まっとうな恋愛ものを読める日が来るとは・・・。アペンドシナリオもよかったです。まさかの7話以降のお話、ありがとうございますごちそうさまです。伽藍さんのフルボイスパッチ付きファンディスクが来る日を心待ちにしております。また、瑞城高丸の主従コンビが一線を越える外伝的なお話も正座で待っています。これは本編でいう二話くらいの分量でしっかり語って欲しいエピソードだと思っているので、気長に待っています。主従萌をこじらせていてすみません。鶴子

さんは･･･親戚のお姐さんポジがしっくりきすぎて不憫なのですが、相手が不在なのはきっと次回作でパートナーが現れるフラグですよね？（だといいな）今後の展開を楽しみにしております』
1+4p（3374・Act.）

え一自分そんな変な色恋ばかり書いていたっけ…（回想）…姉弟…未亡人…双子丼…雌ゴリラ…なんのことやらとんと見当がつきかねます。さて、お言葉の通り、伽藍とキトラの関係性は本編第七話を境に大きく変化しますので、今後書かれる帝都飛天の外伝はこの話以前か以降かを記しておいた方が良いかもしれません。ええとそうさのー、第七話以前を、ＢＣ．＝Ｂｅｆｏｒｅ ｃｏｕｐｌｅ（ビフォア・カップル、カップル以前）、以降をＡＤ．＝Ａｎｎｏ Ｄｅｒｒｅ（アンノ・デレ、天狗がデレた年に）と表記し———言い出しておいてなんですが、面倒くさいんでたぶんやらないと思います。【希】

『「帝都飛天大作戦」プレイしました！　相変わらずお酒の美味しくなる贅沢な文章でしたが、今回はいつも以上にエンタメ感強くて楽しかったです！続編もお待ちしています。天狗の仕業 bot はまだでしょうか？』
1+4p（2587・チョコクロ）

希は脱稿してお酒の女神様に逢いに行く、その時をひたすら願って祈ってのたうち回って書きますので、どうしても文の端から酒への憧れが滲み出てしまうのでしょう———泊まり込み作業中の真夜中、同僚が寝た隙を狙って、どうにか音を立てないように工夫して、こっそり隠れて缶ビールプシュとかしていませんともええ。
で、ｂｏｔですか。はあ。ｂｏｔてアレですよね、人が狩りしているｍｏｂ横殴りしてドロップアイテムかっさらっていったり、間違えて落とした＋７グラディウスを拾って持ち去ったりうおのれえええええええ！！！！（希のｂｏｔに対する知識はその程度で停滞しています）【希】

〇その他

『今回もコミケに参戦されましたね！会員証とか毎回持って行ってる気がします。最近では一般企業の参加が増えてきたので、全然知らない人がこれを機会に知るようになっていったりするのでしょうかね～。ということで、今までの歴史を振り返る本とか次回のコミケにでも是非！』
4p（3789・B.B.）

コミケいらしていただきありがとうございます！　今までの歴史…。ライアーソフトのマウンテンサイクルからは様々な黒歴史が発掘されて危険です！！【しまさら】

コミックマーケット87、
弊社ブースにお越しいただきまして
ありがとうございました！



★「月刊うそ。」48号、歴史特集をお送りしました。ライアーらしいディープな味付けをお楽しみいただければ幸いです。
★次回テーマは「料理」です。
（995・猫井篤さんからいただきました！ 1+4p 贈呈）
★皆様の心に生きているライアーソフト・レイルソフト作品の「料理」について送ってください！
★会報テーマも募集しております。採用者にはポイントプレゼント！広いテーマの方が採用されやすいかも？（ちなみに、テーマだけは号を重ねても投稿内容を持ち越しています。現在までにも素敵なテーマを多数いただいておりますので、採用までお時間がかかるかもしれません。ご容赦を！）
★それでは、お読みいただきましてありがとうございました！

●コミックマーケット87発売・新規グッズご紹介●

●帝都飛天大作戦・発売記念アンソロジー／￥2200



**書き下ろし小説＆漫画に加え、
雑誌やweb等に掲載された応援漫画、
イラスト、小説を収録したアンソロジー。**

【執筆者】※順不同、敬称略
小説／希、禾刀郷、海原望、睦月たたら、加納京太、高尾登山
漫画・イラスト／酔花、Ｌｅｍ、大石竜子、天原埜乃、浦辺克斗

※本編のネタバレが含まれますので、クリア後の鑑賞をお勧めします。
※「帝都飛天大作戦・コンセプトワークブック」の内容は含みません。

●屋上の百合霊さん・ドラマＣＤ「九星ラジオ」（２枚組、サントラ付）／￥4000

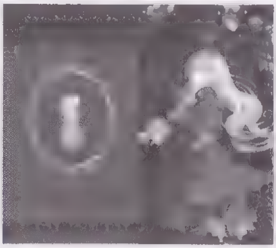


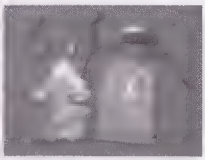
**「屋上の百合霊さん」ドラマＣＤ第４弾は
ドラマ＆サントラの２枚組。**

・ＤＩＳＫ１はドラマ「九星ラジオ」
・ＤＩＳＫ２はサントラ＆ドラマ「百合霊歌謡ショー」
・「おはよう・おやすみ・クッキング」オマケボイス付き
（一木羽美・双野沙紗・三山音七・榎木サチ・永谷恵・遠見結奈）

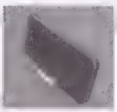
●漆黒のシャルノス・グッズセット／￥2200

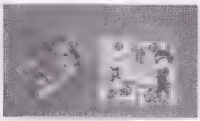
Webアンケートから実現した「漆黒のシャルノス」グッズセット！

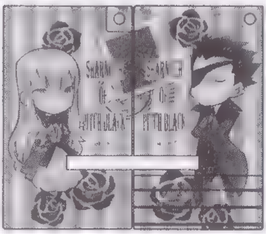




・マイクロファイバークリーナー巾着
　スマートフォンの収納に適した、巾着タイプのカバー。入れて持ち歩くだけでスマホが綺麗になります！
※160×90mm、マイクロファイバーポリエステル、両引き紐。







・スマホスタンドキーホルダー
　キーホルダーとして持ち歩いても良し。
　組み合わせればスマートフォンスタンドになります。
※35×52mm、２枚１組。
※スマホは横置きのみ可能。

－ライアーソフト・レイルソフトＦＣ販売物一覧－

※価格は全て税込です。※「通販要綱」を参考にお申し込みください。

<ゲーム>

●コンシューマ

紫影のソナーニルRefrain／PSP版(※1) ￥6,400

紫影のソナーニルRefrain／Xbox360版(※1) ￥6,400

●スチームパンクシリーズ

黄雷のガクトゥーン Shining night [普及版] (※2) ￥3,840

黄雷のガクトゥーン[通常版] ￥5,440

初回特典冊子付 ￥5,940

ＦＣ購入特典：アペンドシナリオCD「マスターの１日」

紫影のソナーニル (※在庫少なめ) ￥7,040

ＦＣ購入特典：アペンドシナリオCD「幾つかの、冴えたやり方」

白光のヴァルーシア ￥7,040

ＦＣ購入特典：アペンドシナリオCD「それは、彼女達の幕間」

漆黒のシャルノス FullvoiceReBORN(※3) ￥3,000

赫炎のインガノック FullvoiceReBORN(※3) ￥3,000

●ライアーソフト

帝都飛天大作戦 ￥7,000

予約特典：特製デジコンROM

ＦＣ購入特典：アペンドシナリオCD「帝都飛天閑話」

ガチゆるヒーローバトル姫巫女銀河 ￥4,500

ＦＣ購入特典：ビッ●リマン風シール（２種ランダム）

平グモちゃん-戦国下剋上絵巻-(※4)

[豪華限定版]¥7,840 /[通常版]¥6,240

屋上の百合霊さん [普及版] (※5) ￥4,640

オイランルージュ(※6) ￥7,040

●レイルソフト

星継駅疾走軌 ￥3,840

ＦＣ購入特典：冊子「星継駅疾走軌・追補編」

星継駅蒐集箱 ￥3,840

ＦＣ購入特典：冊子「星継駅蒐集箱・追補編」

花散峪山人考 ￥7,040

予約特典：「花散峪山人考」サウンドトラック（なくなり次第終了）

ＦＣ購入特典：「レイルサウンド・ザ・ベスト」(「霞外籠逗留記」「紅殻町博物誌」「信天翁航海録」ベストサウンドトラック)

信天翁航海録 ￥7,040

ＦＣ購入特典：冊子「信天翁航海録削除部分流出版」

●ファンディスク

ハチポチ ￥7,040

ＦＣ購入特典：冊子「月刊うそ。特別号」

Ⓓ Steampunk Full-voice Fandisk ￥3,000

ＦＣ購入特典：書き下ろしノベルペーパー

Ⓓ ＦＤ3読参子育成企画(FC専売) ￥2,000

(※1)予約特典：「大機関辞典」+ファンタズマゴリアカード／ＦＣ購入特典:カンバッジ

(※2)予約特典ドラマＣＤ「黄雷のガクトゥーン：シャイニングリーグ」／ＦＣ購入特典：アペンドシナリオＣＤ「乙女の戦装束」

(※3)ＦＣ購入特典：スタッフ同人誌「スチパントリビュート」FullvioceReBORNシリーズは同一の特典ですので、2本以上お買い上げの場合も1回のご購入につき1冊付属とさせていただきます。

(※4)豪華限定版特典（同梱）：フルカラー設定資料集「平グモちゃん」サウンドトラック　FC購入特典：平グモちゃんペーパークラフトＣＤ

(※5)予約特典：挿入歌マキシＣＤ「ＡＡ愛！」／ＦＣ購入特典：ドラマＣＤ「新しくこの学園に来たあなた達に」

(※6)予約特典：「オイランルージュ福読本」／ＦＣ購入特典：アペンドシナリオＣＤ「ある大紋日の高瀬屋」

(※7)予約購入特典：マキシシングル「真白蘭情」

<グッズ>

●Ｃ８６グッズ

Ⓓ帝都飛天コンセプトワークブック ￥1,200

Ⓓソナーニルドラマ CD「ブルックリンの騎士」 ￥2,500

・紫影のソナーニル タオルセット ￥3,300

㊙紫影のソナーニル 缶バッジ 1個￥200

Ⓓ屋上の百合霊さんドラマＣＤ3「[illegible]」 ￥2,500

Ⓓ百合霊さん キーホルダー+ポストカード ￥1,800

Ⓓ激情版!?ガチゆるヒーローバトルカムイッ[illegible] ￥1,200

・ライアーセット (ワークブック+カムイ[illegible]) ￥3,300

Ⓓライアートールケースセット（６枚収納ケース+ポスカ+[illegible]） ￥1,100

●音楽ＣＤ

ⒹボーカルＣＤ「Ｐｒｏｓｉｔ！」(※7) ￥3,000

ⒹボーカルＣＤ「Ｓａｌｕｔｅ！」 ￥3,000

Ⓓサフィズムの舷窓アレンジＣＤ「AIGRETTE」 ￥2,000

ⒹLiarサントラ「ぶるま」「わらび」「[illegible]」各 ￥2,500

・Liar-softサントラ3セット（ケース付） ￥6,000

●スチームパンクシリーズグッズ

Ⓓ黄雷のガクトゥーンドラマCD「間違いの悲劇」 ￥2,000

Ⓓ黄雷のガクトゥーン　クリアファイル ￥500

・黄雷のガクトゥーン　ひざ掛け ￥3,000

㊙黄雷のガクトゥーン　タペストリー ￥3,500

Ⓓスチームパンク５周年記念冊子 ￥1,000

Ⓓ英訳書籍「スチームパンクラフガイド」 ￥1,000

ⒹドラマCD「スチームパンククインテット」 ￥2,000

Ⓓ蒼天のセレナリアファンブック ￥1,800

●レイル文庫

Ⓓ星継駅疾走軌外伝「烈女修業時代」 ￥700

Ⓓ星継駅年代史外伝「辻裏物怪道中」 ￥500

Ⓓ星継駅擾乱譚外伝「雨ヶ森去来抄」 ￥500

●その他グッズ

Ⓓ屋上の百合霊さんドラマCD2「友情プラン」 ￥2,000

Ⓓ屋上の百合霊さんドラマCD1「恋人ごっこ」 ￥2,000

Ⓓ屋上の百合霊さんトートバッグ ￥1,500

Ⓓ屋上の百合霊さんクリアファイル[illegible] ￥500

ⒹＩＣカードステッカー ￥1,000

Ⓓライブ記念マイクロファイバータオル ￥500

ⒹLiar&raiL　PosterArtCollection ￥1,500

ⒹＢＧＭフェスタＣＤ「隻眼のティンダロス」 ￥2,000

Ⓓ『月刊うそ。』バックナンバー

(11～13,16～28,30,31,33～35,37～48号) 各￥400

Ⓓ単品注文の場合、DM便(￥300)での発送が可能です。

㊙他のグッズとは別送になり、別途送料がかかります。

㊙カンバッジは不透明な袋に個包装し、柄がわからない状態でお届けします。15個まではDM便発送可能です。

※ライアーソフト第25弾『水スペ川野口ノブ探検隊』までの作品、及び『蒼天のセレナリアFullvoiceReBORN』『どすこい！女雷相撲』、レイルソフト第２弾『紅殻町博物誌』までの作品はロットアップしました。現在、追加生産・販売は行っておりません。一部タイトルは弊社ＨＰよりＤＬ販売しております。

ここだけの話

「どうしてもこのソフトが欲しい！」場合は、一応お問い合わせください（駄目元で）。

ＦＣ会員様にだけひっそりと利く融通が、あったりなかったり……。

通信販売要綱

【基本的な流れ】
欲しい商品をリストアップ→価格を計算→下記リストから送料を確認して加算
→合計金額をご入金・必須事項を弊社に通知

《お支払い方法》 郵便振替、銀行振込、現金書留、ヤマト便代引がご利用いただけます。

①郵便振替の場合　００１４０－１－６００１８４　加入者名　㈱ビジネスパートナー
※FC会報『月刊うそ』に同封されている振替用紙か、または郵便局置きの「上１桁ゼロの用紙」をご利用ください。
※払込用紙の通信欄に、必須事項（後述）をお書きください。

②銀行振込の場合　みずほ銀行　新宿支店　普通口座５４３１１８１　加入者名　㈱ビジネスパートナー
※入金後、必須事項（後述）を、メール、ＦＡＸ、郵送いずれかの方法で弊社までお送りください。
（その際、振込時の控えのコピーを添付してくださると通販事務を迅速に進めることができます）

③現金書留の場合
※封筒の中に必ず、必須事項（後述）を記した紙を同封してください。

④ヤマト便代引の場合
弊社ホームページの「ＳＨＯＰ」→「ＦＣ会員専用ページ」→「会員専用代引きサイト」の申込フォームよりお申込みください。
その後は、自動確認メール→弊社担当者からの注文受付完了メール→発送という流れになります。
届いた商品と引き替えに、代金をお支払いください。
※自動確認メールが３日以内に届かない場合、フォームが正常に作動していない可能性がございますので、お問い合わせください。

《必須事項》
ご注文内容・会員番号・氏名・住所・ＴＥＬ・メールアドレス（あれば）・配送日時の希望がある場合は曜日・時間帯を必ずお書き添えください！
※送り先は原則、会員登録住所のみとさせていただきます。
それ以外の場所への発送は、特別な理由がない限りお断りいたしますので、ご自宅でお受け取り可能な日付をご指定ください。
送り先を変更される場合は、理由を明記の上、「登録住所以外へ発送希望」など目立つようにお書き添えください。
※必須事項に漏れがあった場合、発送の対応が遅れることがあります。

《宛先》
（メール）fc@liar.co.jp
（ＦＡＸ）03-3355-6736
（郵送）　〒160-0022　東京都新宿区新宿1-25-3　エクセルコート新宿301　株式会社ビジネスパートナー

《送料》

①ヤマト便

下記に該当しない地区	６４０円
関西地区　北東北地区	７４０円
中国地区	８５０円
四国地区	９５０円
北海道　九州地区	１０６０円
沖縄地区	１２６０円

※ヤマト便　到着日時のご指定について※
・希望お届け日
・希望配達時間
（"午前中""12-14""14-16""16-18""18-20""20-21"）
をご指定いただけます。

②クロネコＤＭ便　※2015年４月以降、「クロネコメール便」のサービス停止に従い、「クロネコＤＭ便」への移行を予定しております。
「ＤＭ便対応可能」商品を単品でご注文の場合のみご利用いただけます。
送料は従来通り３００円となります。
※お届け日時の指定はできません。
※郵送中の事故などによる外装の破損・折れ曲がりなどでの商品の交換には、応じかねる場合がありますので、ご了承ください。
※代引きでのご注文の場合、DM便での発送はご利用いただけません。

投稿者名／猫井篤さんのトピックスネタ《エロゲから学ぶ正しい歴史認識》採用させていただきました！



◆投稿ポイントの変更について◆

今号から投稿に与えられるポイントが変更になります。

・前号までは

●「各コーナー投稿ごとに1点もらえる投稿ポイント（1点）」＋「投稿が採用されるともらえる採用ポイント（2点より～）」

・今号からは

●採用された文字ネタ・おたより1つにつき5点（ＴＯＰＩＸコーナーも含む）

●イラストは１０点

「各コーナー投稿ごとに１点もらえる投稿ポイント」は廃止となります。ご了承下さい。

<編集後記>投稿ポイントの集計方法が変わります。 そして会員専用ホームページのパスワードも変更になります。 大事なことなので本当は二度言いたいけれどもうそろそろ文字数 （グランテール井上）

2015年3月16日にパスワードが変更になります。

《会員専用ホームページ》

http://www.liar.co.jp/cgi-bin/gate/gate.cgi

※在庫切れ会報のバックナンバーPDF、会報宛て投稿フォーム、壁紙やコミック等ＦＣ限定のコンテンツ多数！

※以下のＩＤとパスワードでお入りください。

ID:member　　Pass:history48

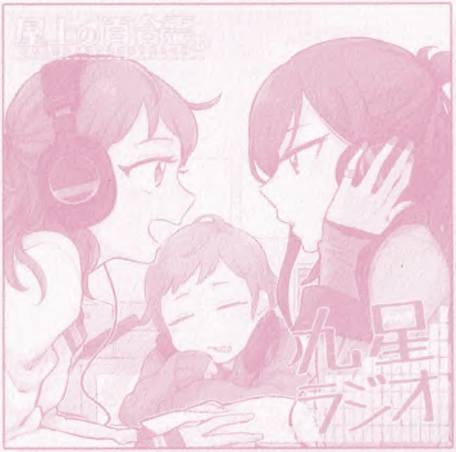
《お便りの宛先》

〒160-0022　東京都新宿区新宿 1-25-3
エクセルコート新宿 301
ＦＡＸ.03-3355-6736　e-mail fc@liar.co.jp
※会員ページの投稿フォームもご利用ください

ライアーソフトファンクラブ会報
『月刊うそ。』第 48 号
年数回発行　2015 年 3 月 10 日発行
発行：(株)ビジネスパートナー　ライアーソフト
編集：『月刊うそ。』編集チーム
表紙レイアウト：しまさらゆめき
表紙・巻末漫画：Ｌｅｍ
発行：あかつき印刷

twitter アカウント /@liar_railsoft
スタッフブログ /http://blog.livedoor.jp/liar__rail/

屋上の百合霊さん
DRAMA CD









きっと、ずっと、もっと。キラキラする何かをあなたに

屋上の百合霊さんドラマCDシリーズ
好評発売中！

屋上の百合霊さんオンリーイベント「めざせユリトピア2」
2015年4月19日(日)　川崎市産業振興会館にて開催！

新書館より2015年春、描き下ろしコミカライズ
2冊が発売予定！お楽しみに!!

ライアーソフトファンクラブ会報『月刊うそ。』
二〇一五年三月一〇日発行
年三回以上発行
(株)ビジネスパートナー　ライアーソフト